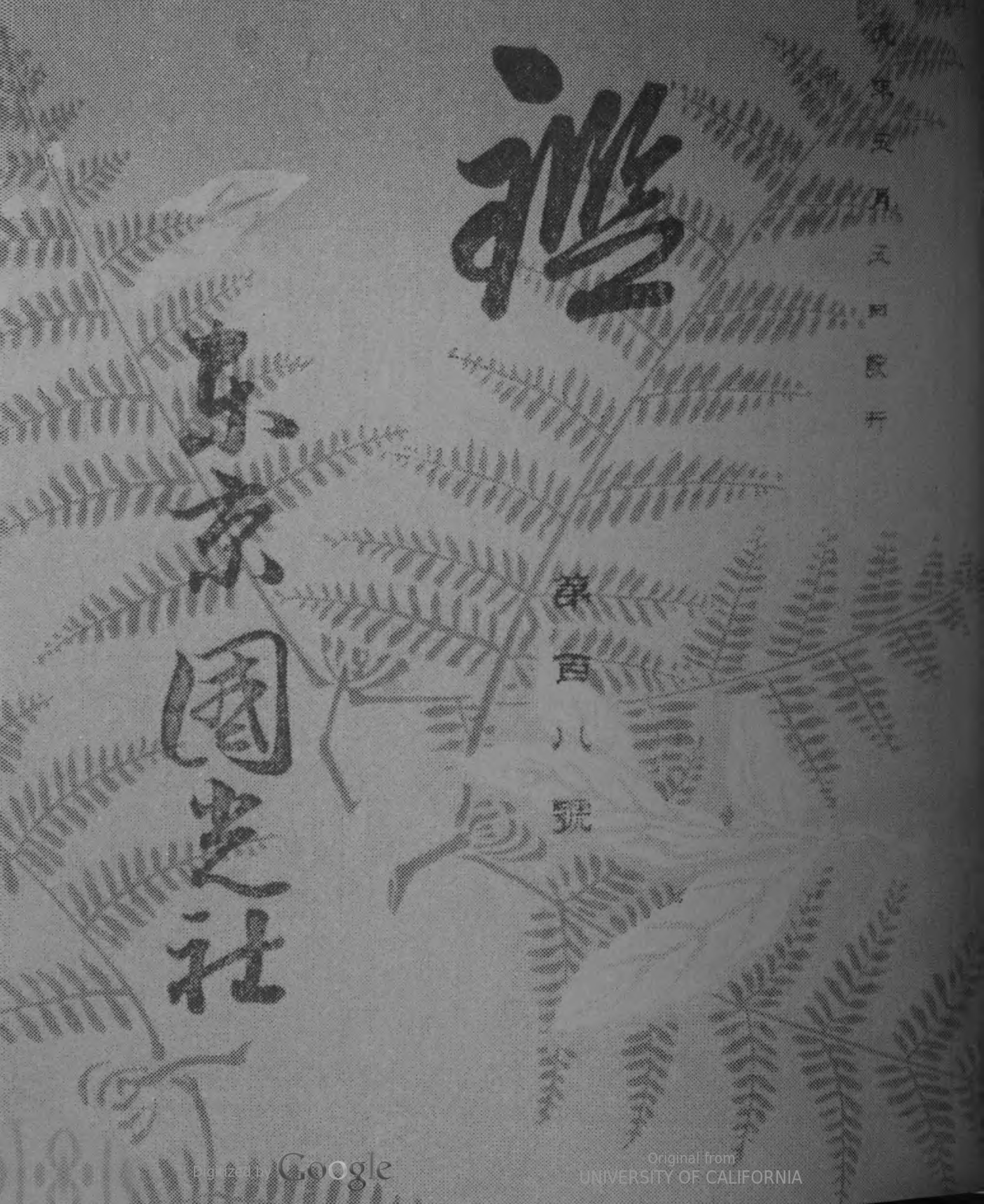
明治二十九年五月五日發行

女鑑

第百八號

東京國光社



女鑑第百八號

目錄

松風村雨



教育者の精神

教育者の心は、常に春の花の時に逢ひて咲き出づるが如く、而して、また秋の月の隈なく照りわたれるが如く、溫順にして、情ふかく、高潔にして行たゞしかるべし、兒童の教育を擔當し、その徳性を涵養し、品質を陶冶するもの、いかで心をここに用ゐざるべき。

小學教員たると、高等女學校以上の諸學校教員たるとをいはず、また専門學科教員たると、普通學科教員たるとをとはず、苟國家教育の一部を負擔するものは、かならず先この國の爲に、良き國民をつくるを以て、その身の本分とせざるべからず。其の心既に定れば、其の行も必正しからざるを得ざるべし。然るに、世にはなは善良なる教員に乏きを如何ともしがたし。抑これ何等の原由にいづることぞ。

顧ふに、今の教育者たらんとするもの、教員たるもの、その當初の精神は、いかにありけん、道の爲か、はた國の爲か、はた名の爲か、はた利の爲か。吾人は、強に

これを論ふことを好まず。人々みづから内に省ば、その疚きと疚からざるとは、おのづから明かなるべきなり。

たゞ我が國家の上よりいはゞ、今日の世の中ばかり心を悩すべきことはあらざるべく思はる。この際にあたりて、一般教育者たるものゝ精神は、いかに正しく、いかに堅からざるべからざるかは、讀者も亦おもひ合さるゝ所あるべし。

そも〳〵、教育者の務は、たゞ一時の賃仕事にあらず、其の人終生の事業なり。これを一時の事と思ふは、その大本既にあやまれるなり。また、教育者の務は、たゞその擔任する所の學科を教ふるのみにあらず、子弟の心身を訓練すること最重要なり。これをたゞ學科のみ授れば足れりと思ふは、その大本すでにあやまれるなり。世の教育者を待つものゝ、やゝもすれば、たゞ學藝のみを善くすれば可なりとなし。また少し才器あれば用ゐるべしとなし。教育の重任をあげて、これに一任することあり、此等より生ずる弊害の如何は讀者もまた思ひ合さるゝ所あるべし。

されば、世人の教育者に望む所も、今後は大にての趣を異にせざるべからず。教育者もまた、たゞ必須の學科をよくすれば足れりと思はず、[illegible]

もに完からんことを務むべし。敎員免許規則の規定に遵ひ、試驗に合格さへすれば足れりと思ふことなく、女學校、師範學校等に入り、成規の課程を修めれば足れりと思ふことなく、前途のはるかなる、責任のおもきこの敎育界に、終生その身を委ねざるべからざることを覺悟すべし。

吾人は、なほ、一の希望あり。敎育者の勉强と熱心とに由りて、この敎育思想の普く世人の腦裡に充滿し、國民一般に、力をこの永久不磨の大業に盡くさんことを期すること是なり。

あゝ、敎育者は、斯くも重大なる責務を負ふて、世に立つべきものなり。その精神いかでか、堅く正しからざるを得べき。なほ、その備ふべき諸德をいはゞ、仁慈、信義、廉直、剛毅、而して、忠孝の大綱もてこれをつなぐにあるのみ。かくてこそ、わが　大君の　大御言をかしこみてその任をまたうするを得べけれ。

論說

事務者としての女子の風儀

川崎春帆

我國古來、女子の務とするところは、専ら家内の諸事を整へ理め、よく舅姑に仕へ、よく兒孫を養育して、夫をして内に顧る慮なからしむるを要とはなしぬ。

さるに、時勢の遷り變りにしたがひ、世界の各國、たがひに富强をきそふにより、世の中の事物、ますく頻繁となり、國民擧りてこの産業に勉勵する有様となれる世となり、殊に膽を嘗め薪に臥しても、大に御世の榮を世界に輝さんと決心せる我皇國にては、男子の業務愈繁多となれるは言ふを俟たず。女子たるものは、その家事の狀況によりては、閫外の業務にも從事して、世間一般の事務を營む必要起り自ら昔時に於ける如く、女子は足閫の外に出でずといふことのみを株守すべからざることゝはなれり。

されど、已に、古には無かりし、電話交換所の技手、或は病院の看護婦、紡績其の他諸工場の工女の如き職業に從事する者も、近年日に益多數とはなれり。さてまた、將來國内の事物、猶ますく頻繁となるに至れど、郵便鐵道の事務、または一般の商家、諸會社銀行等の事務員にも、追々婦人を採用することゝもなるに至るべし。女子の將來も、また多事なりといふべし。

かくの如く、女子閫外に出でゝ、各其事に從ひ、男子と相並びて、業を營むといふ風は、日に益盛になれるさまなるが、この際に於ける女子の思想の變化、即從來[illegible]

時かます〳〵その胸中に燃へ立つに至らざるかの一事は、甚氣遣ひなることなり。

この頃、府下なる或る女學校に至りて參觀を請ひけるに、事務員なる七八人の婦人たちの詰所の模樣、ならびに、その事務員の外來人に接せらるゝ言辭など、如何にも遺憾に思ひたることありし。また病院の看護婦のさま、さては電話交換のときに、人は見えざれども、時としては、如何にも快からざる交換手の言詞の響くことあるなど、間々彼の女尊男卑の國なる女子にさへなき言語擧動のあることもあるやう思はるゝなり。甚遺憾なることゝいふべし。

靜婉温良なる我國の女風は、まことに、世界に並びなきところにして、外邦の女子も、心あるものは、遙に日出づる國の清淑なる女風を慕ひ居るものもありと聞きけるに、却りて彼等の國にさへなき温良ならざる風儀の、我國多數なる女子の中に發生せむとするは、まことに歎かはしきの至りなり。自ら同權を唱へず、自ら高ぶらざるも其爲す業にして甚緊要に其行ふ所にして貴ふべければ婦人の地位は、自然に高まらさることあらむや。

冀くは閫を出でずといふ時の氣風を失はずして、閫外にても、その温良靜淑の風を保たれなむ、我產業界の美觀、これにますものなからむ。かくてこそ、明治の御世の女子の好摸範を後の世にのこすものといふべけれ。

女子敎育一班（十七）

三輪田眞佐子

女子の德育を全うせんには、單に良師を得るのみにて滿足すべからず。そは今日の學校は、往時の私塾と異なりて、おのづから敎師と弟子との間、疎遠なるべき事情あるは免れがたきものなれど、良師を撰ぶと同時

に、校風を盛に起すべきなり。

そも〳〵、校風とは學校特得の氣風にして、其日途や、苟その校門に入るものを、悉く同化せんためなり、若し學校にして校風なるものなからんか、そが生徒たるものは、おのがじゝ好むところの僻習を守り、互にわれを聖なりとほこらんも、誰か烏の雌雄を知らむと、品評し得べき情態ならむには、たま〳〵上智のものすら、自ら適從するところに迷ふらんかし、されどわが心を、玉のごとく琢かむや願ふものも、概ね文字の末技を得るばかりにて止まむ、わきて下智のものは、何をしるべに心を修めん、然るに女學校には校風の盛なるもの少きとかや。

勿論人と生れんには、善にまれ、惡にまれ、一種の氣質なる如く、既に女學校と言ひ得んほどのものには、その存在に伴ひ、おのづから一種の校風は生ずるものならん。されど邪惡なる、亂雜なる、將た虚飾なる風儀などはあらずもがな、唯女子を有徳に感化し得る、善良なる校風こそ望ましけれ、さて女子の德育上、あらまほしき校風には、左に述べん要件を具ふべきものならむ。

第一　主義、苟も校風と言はむには、必ず主義定まらでやはあるべき、蓋しおのれの言ふ主義とは、文學を研究するとか、あるは工藝を實習するとかの目的にはあらず、たゞ何なる目的の女學校を問はず、質朴とか、靜淑とか、親切とかあるは、着實、若しくは國民の母を以て任するとか言ふやう、一種の信向定まりて、萬事その主義に準じて進むこそ校風と言ふべけれ、朝に洋服を着し、夕に和衣を裝ひ、時とすれば自由結婚を唱へ、時とすればわが舊慣を變ずべからずと歎くやう、見識の行はれざる學校は、絶えて校風なきものぞかし、あはれ獸だに羽を裝はず、鳥だに毛を蒙らざるに、なぞか人は僞の生活をなす、從ひて確信なき校舍を設

け、主義なき教訓をなすかこ
尤もかゝる主義は、偶然起るものにはあらず、全くそ
の校なる教師の學風より發するものなり、故に教育者たるものは、心中動かすべからざる主義存して、つねづねこれを發揚して、言語となり、擧動となり、文章となり、將た演説となり、以て校内に一種の精氣を充たしめてこそ、始めて主義一貫するなれや、徒に諸家の説に迷ひ、未だ一定の主義なきものは、決して校風を作り得るものにはあらじ。むかし山崎闇齋なる儒者ありけり、嘗て弟子たちをまねき、方今彼の邦孔子を以て大將とし、孟子を以て副將とし、騎數萬を率ゐて我が邦を攻むるあらむ、吾が黨孔孟の道を學ぶものは、こを如何にするかと問ひけるに、默然答ふるものなけれど、暗齋曰ひけらく、不幸にしてもしこの厄に逢はむ、吾黨路に甲冑を着、手に鋭をとり、これと一戰孔孟を擒にし、以て國恩を報いんのみ、これ即ち孔孟の道なりと諭しけりとかや、實に師たるものは、かゝる見識ありてこそ。

第二　實踐、言ふは易く行ふは難けれどにや、如何なる女學校にも、それ／＼主義の重ずべきを知るめるも、好結果あらざるは、實踐することなきに由らむ、こを實踐する方法は他なし、師たるもの先づ實踐すべし、たとへば女教師自らまだき嫉妬の念を洗はずして、女生に公平を教へ、あるは先生自ら懇篤なる行をなさで、學生の浮薄を戒めんど　さまで効能あるまじ、馬をひきて水を渉らんとならむ、自ら先づ河に入らざるべからず、人を教ふるものなどか、我を顧ずして彼を責むべき。既に師たるもの道徳を實踐して、始めて學生の躬行を勸むべし、然るに、實際國の大祭、あるは、もろ／＼の式日に於て、學生の式場に出席するものの少きは、掩ベからざる事實なりとかや、そは學生の意中、平日欠席せむ、試驗に影響せんも、式日は講義

もなく、筆記もなきを以て、自已直接の不利は多からじと思ふ心より、かゝる失態を醸すらむかし、今日國民道徳を盛にすべしと唱ふものあれば、式日などに欠席して、あるは觀花に、あるは演劇にと、遊怠の欲を恣にする校風ならむには、國家の前途憂ふべきことにこそ、されど實踐の校風ならむには、かゝる折にこそ勤めて出校するなれ、その他女學校には華美奢侈、及び卑俗などの裝、及び嫉妬柔弱、あるは破廉耻の行爲は、必なきやう實踐すべし。

第三　制裁、道徳を破るときは、内心おのづから苦痛を覺ゆるのみならず、學校などにては、稍もすれば善事に黨するより、惡事に組するもの多數を占め、その勢に乘して、自の非道を悟らざることあり。一例を擧げんに、たまたま教師に嘲弄的の字を附するものあれば、一校擧りてこれに同化し、その字を呼ぶ如き例 [illegible]

校風を盛ならしめんとならば、制裁を加ふることも亦なかるべからず、さてその制裁は如何なるものよからんか。

思ふに、女生出校つねなきことあるは、著しき非行あること、若しくは生徒の職分を全うせざること等あらんには、學校より相當の處分あるは通例なれど、こは表面上二三のことを戒むるに過ぎず、從ひてさまで効驗なからむ、故におのれは、生徒擧りて校風を重じ互に信義を失ふものあればこを戒め、嫉妬の心あるものは衆に迂まれ、人を誹るものは反て淺ましきものと耻かしめらるなどの習慣、校友間に生ぜんには、おのづから一種の制裁と信しぬ、然らざれば女子はなべて隱にはつまはじきする人だに、陽には同感を裝ひ、且つ心中非なりと信ずることも、外面は雷同することあめり、あはれ速にこの弊風を矯めざれば、いかでか [illegible]

史談



松風、村雨

壇井ふく子

海山も、數ならざる父母の恩の、深きをくまず、高きをもあふがざる子たちの多かる世の中に、淺澤沼の淺き心を以て、養ひはぐゝまれし親に、よく深草野の深き誠を盡くし、玉とも花ともたぐへられむ身の、徒に白波の知らぬ浦わのもくずとなり果ても、遂に親をうらまず、天を咎めず、唯ゆく水の清き心に任せて、すましたる心も名も潔よき、松風、村雨といふ姉妹の子の身の上、きくも語るも身にしみ亘りて、只袖をしぼる計りになむ。いでや、此の姉妹の子は、たれの子なるぞと尋るに、讃州鹽飽の大領時國なる者の女なりけり。まだいわけなきふり分の頭より、はらからよくむつび、よくとけ、互みに蝶となり、花となりて、父母の膝下にかしづき、かしづかれ、めでられつ、なぐさめつ、のどけき風は常に家に充ちけるに、賴まれぬは人生、あはれ母なる人、世をはやうして、昨日迄も姉妹が緣の黑髪をかいなでし手の、石かとばかり凝りて、草深き野邊のれくつきに、秋の夕風ひやゝかなり。姉妹はいとかなしみて、諸共に消えんばかりにあこがれなげきしかど、流石にかへらぬ事とあきらめて、なほ父のあるを賴みに、果敢なき露の命を存命へぬ。其後、時國後妻をめとりしに、失せたりし母の、生きもかへりたる心地して、姉妹の子は大に悅び、心を盡し、行ひを愼みて仕へんとするに、母なる人の性、もとねぢけたれど、人の道をも、親たるべきの勤めをも知らず、まゝしき心に、二人の子の容姿の花の如くうるはしく、

心ばへさへやさしく、能く己れに仕へて、一筋に子の道を盡して、世の人の譽めたゝえぬものもなけれど、女心のあさましく、我が子の譽めらるゝを悦びもせず、反りてねたましく思ひ、まがりたるふしもなきに、すなほならずと叱りこらし、柔しく仕へても、かたくなよとのゝしるほどに、二人は、彌、巳を省て一入に孝情を盡せど、益々ねたましく、憎く、はてはねたえず竊にあらぬ事をかまへて、夫時國に姉妹をそこし入れたるこそあさましけれ。

さても此母、腹をもいためずして、よき子の母となり、敎えずして孝女をなしたるは、實にもとめても得がたきこよなき幸福にてありけるものを、自ら此幸福を捨つるおろかさ、例へん言の葉も知らずかし。かやうなる女子の世の中にあれどころ、女の性は、皆ひがみたるものなり、貪欲の心のみ深くして、巳にのみ厚く、人をぞあはれまず、たゞかり飾る事狐狸よりも甚し、外面へつらひて、内心にあざける、實に養ひ難しと古の哲人ものたまひしならめど、世の人の口にかゝる事の口惜さよ。されど、こは下愚のもの、女子の中にもまたとはあらぬ毒婦ならむ。

かくて、此毒婦、如何に巧みにこしらへけん、又時國いかに深くまどひけん、此讒言を誠に思ひて、烈火の如くに怒り、親心も今は絶えてなく、二人の娘を殺さんとまでなしたる毒婦の言、それと悟らざりしこそあさましけれ。姉妹はたゞ涙にかきくれて言もいはぬに、つきそふもの、二人に向ひて、など、罪なき事を訴へ給はで、徒らにぬれぎぬをば着給ふ。巳れだに口惜う思ひ侍る者をなどいふに、二人は涙ながらに答ふるやう、我等もと不德にて、母君の御心に叶はず、遂に此罪を得たり。今もし事のまことをあからさまに云ひて、よしや命はのかるゝとも、母は爲に罪を獲給はん。もし母をして罪を得さ[illegible]、我等の不[illegible]

深くなりて、逃るゝ道もなからん。只此儘に云はずして、二人死せんこそよしや先たつ不孝はあれど、中々に罪は輕からめ。死して生みの母御にあはん事、此身の**願ひなりと思ひ定めたれど、**かく默するなり。最早何事もな云ひそと云ひけるに、傅母なる人いたく感じて、いや捨てがたく思ふまゝ、二人のすゝまぬを強て携へ、己が夫なる牟禮兵衛と云ふ者の處へ奔りたりしに、時國はます〳〵いかり猛りて、遂に人をして之を捕へしむ。兵衛も又義理ある男の子、徒に罪なき人を渡して、毒婦の刄の銹となさんやとて、固く二人をかくまひ、己れ追者とたゝかひて遂にたふれぬ。あはれ、かゝる匹夫も、義は知りてけり。姉妹は己れ、故にかゝるうきめを見する事を悲しみて、自ら捕はれむとしたれど、身を殺してまでに助けんとする情もまたすてがたく、遂に又思ひかへし、わづかに身を逃れ走りて船に乗り、船子に實を明せしに、船子も大に之を憐み、船を馳せて攝州須磨の浦に着け、漁者の長なる者の家に託しけるに、長なる者も、二人の容姿の賤しからざるを見、かつ事のよしなどうち聞て、憐む事大方ならず、長く己が家に止めて養育しけるに、二人は惜からぬ命を、人々の情に助けられ、今は身をなきものとし、長等への情へ報ゆる一片にもとて、みづから沖に出でゝ、ならはざる浪に身を碎きて鹽を汲み、家に居ては身を粉にして薪水の勞を取りて、長等を助け、二人互に慰さめつ、慰さめられつ、心を須磨の月にすますものから、或時はまた故郷の事など思ひ出でゝ、はるかに、父なる人は如何にか、母なる人も今はいかにかなどとて、行く水に影をうつしては、袖を絞りてあこがれて語りあふ事もありけり。折しも、中納言在原の行平卿、罪ありて此須磨に謫せられけるが、二人の容貌風姿の賤しからぬを、たゞならず思ひて、如何なる者の娘にて、宿む所は何處ぞなど問ひしかど、二

人は涙ぐみて答へず、二度三度とひ重ねしに、姉の松風やう〳〵に料紙を彼長なる者に乞ひて、和歌一首をぞ書きて見せける。

白波のよするなぎさの世をすごす
　あまの子なれど宿もさだめず

と、水ぐきのあとも床しうなつかしうゑるされたるに、そゞろに袂をしぼられけるとなむ。此娘、後、遂に尼となりたりしとかや。あはれ惜むべき限りになん。後世に鹽汲と云ふうたの出でしも、之をぞあやにかきたてしにやあらん。とあれ、かくなれ、孝女の赤心、毒婦の姦計と互にてらしあひて、一と際うるはしく、世の人の鏡にともと思はるゝ儘にかくなむ。

越後の烈女

故人　屋代弘賢

古人のものしたるものなれど、文章の雅馴なるまゝ、原文にてこゝにのせつ。

ことし八月の末つかたに、小石川水道端に住める與力藤江又三郎の宅に、强盜入りしことあり、あるじはやも男にて、誹諧の會に行き、老母は親類がり行きて、下女と下男のみ留守に居たり、よる亥の刻過ぐる比、門をたゝく音す、あるじのかへりたるならんと思ひて、男出てあけたれど、白刄を提げしもの、五人おし入りて、この男をしばりあげ、部屋に入れて、二人はまもりをり、三人は内にいらんとせしを、下女窓よりのぞきみて、とみに歸り入り、燈火をふきけし、誰れきよ、かれ起きよと、有合ひもせざる人をあるがごとくによばゝり、さて雨戸を音たかくあけて、うしろのか

かゝふに、人影なし、あたりをみれど、稻荷の祠の垣のかげより、さきにみしぬす人三人出でたり、女少もさわがず、こなたへき給へ、みづから道びきすべし、いざとて、先に立ちて刀を前にさげて、椽をあがり、物かげにかくれてまちゐたり。かくてひさしくまてども、入りきたらず、いかゞせしならんと、もとの如く庭にいでゝみるに、さらにかげもなし、垣のかげをのぞきみてもあらず、さてはにげさりしならんと、あけたる門の戸をたて、戸ざしする音を聞きて、男はふるへ聲にて。女をよぶ。女いかゞせしやとゝへど、かくしばられたり、ときてたべといふ、すなはち繩をときながら、此有さまを、かならず人にかたるまじ、あるじにも申すまじといひきかせて、うちに入り子過ぐる比に、あるじかへりたれど、事ゆゑなきさまにて、やすませたり。あくる日、あるじ錢湯にゆきたれど、となりの同僚に逢ひたり、同僚のいはく、夜邊はそこには、何ごと有りしやと。あるじそれがしは、他行してしり侍らずと。いかゞなる事にや、たゞならぬ物おとしけれど、耳たてゝきゝをり、猶物おとせど、出で逢ふべしと、身がまへせしが、その内に納りたれど、うちやすみぬと。あるじかへりて、かのひとのかくいはれしは、なにごとか有りしとゝへど、しかじかとこたふ、さばかりのことを、いかで告げざるやといへど。さん候、ぬす人おしいりたるのみにて、物もうせず、人もあやまたず候へど、申す迄もなしとおもひしなりとこたへて、打ち過ぎぬ、わがちかきあたりに、この家あるじの姉あり、長月なかごに、この女つかひにきたり、姉がいふやう、さきにぬす人しりぞけしは、たぐひなきふるまひなりき、その時いかゞの覺悟にて有りしぞと。女は堅固の田舍人にて、覺悟と申すことはしり侍らず、おしはかりてもみ給へ、白刄さげしもの、、いくたりも入りきたれど、みづからが命はなき物とお

もひしのみにて侍りとこたへし。越後のむすめにて、年二十あまり三になるとぞ、酉彦といふものゝかたりきかしゝなり（苑園小説）

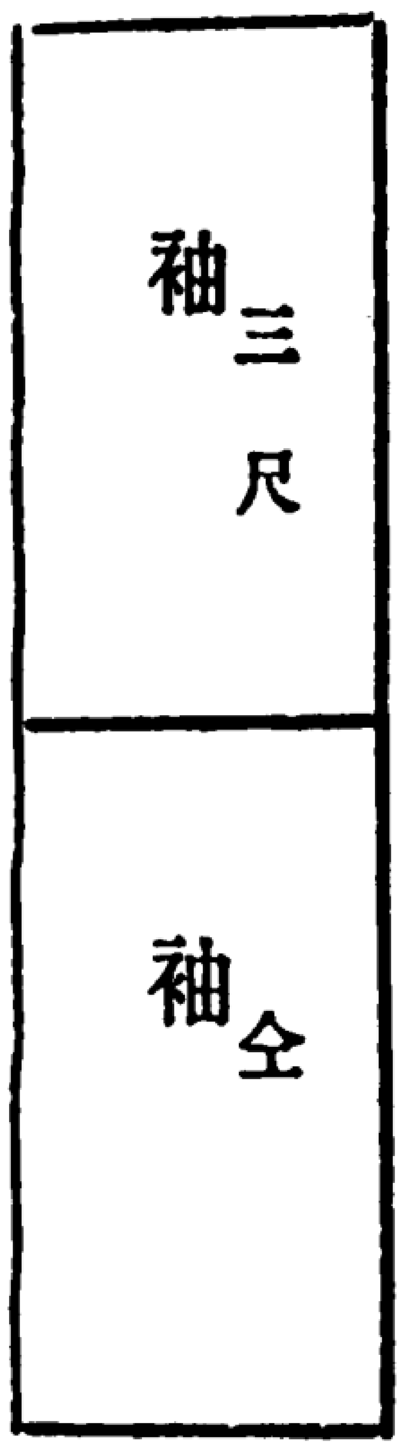


たちぬひ

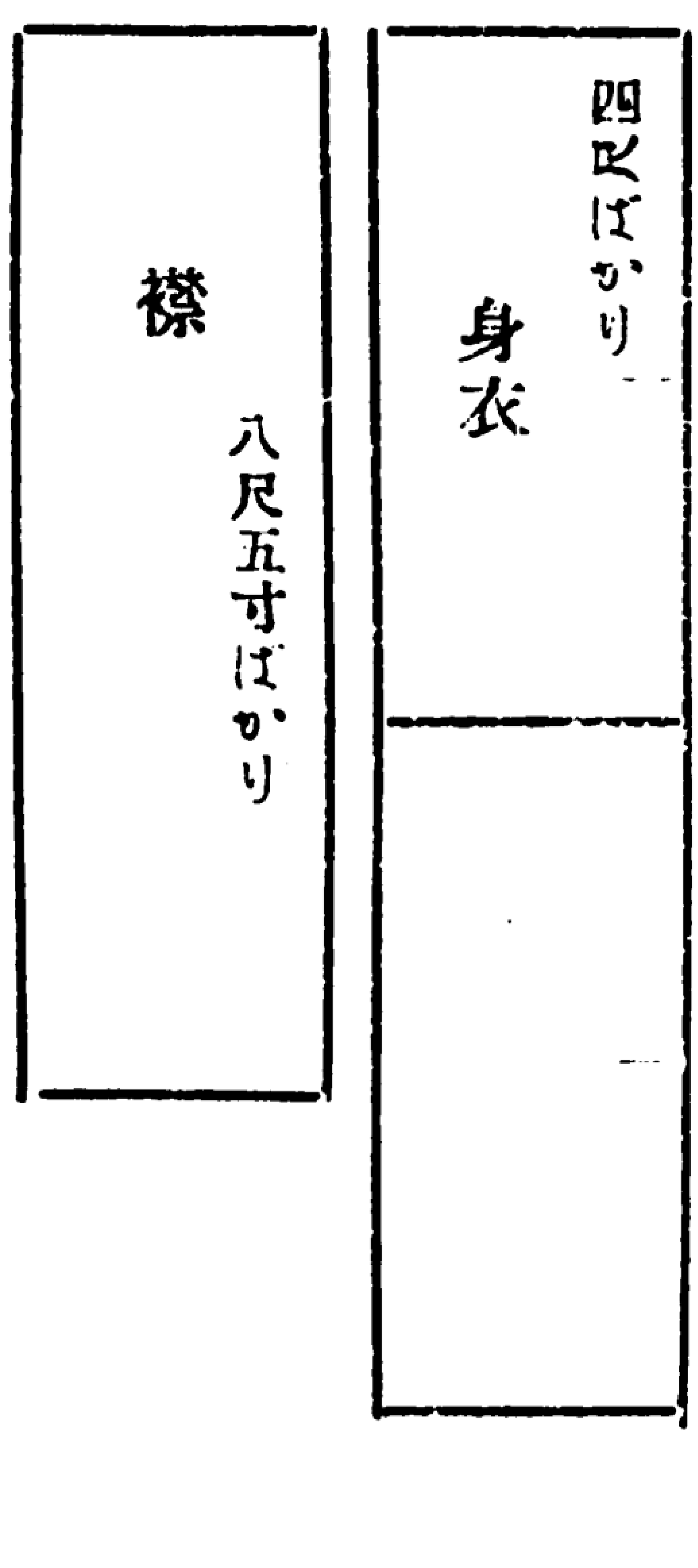
西山たい子

（卅一）女合羽の裁方

衣服をたつ如くにまづ袖をきりとり、身衣の丈を定め殘りたるものより、襟を巾にてとるなり。



女合羽裁ち方圖



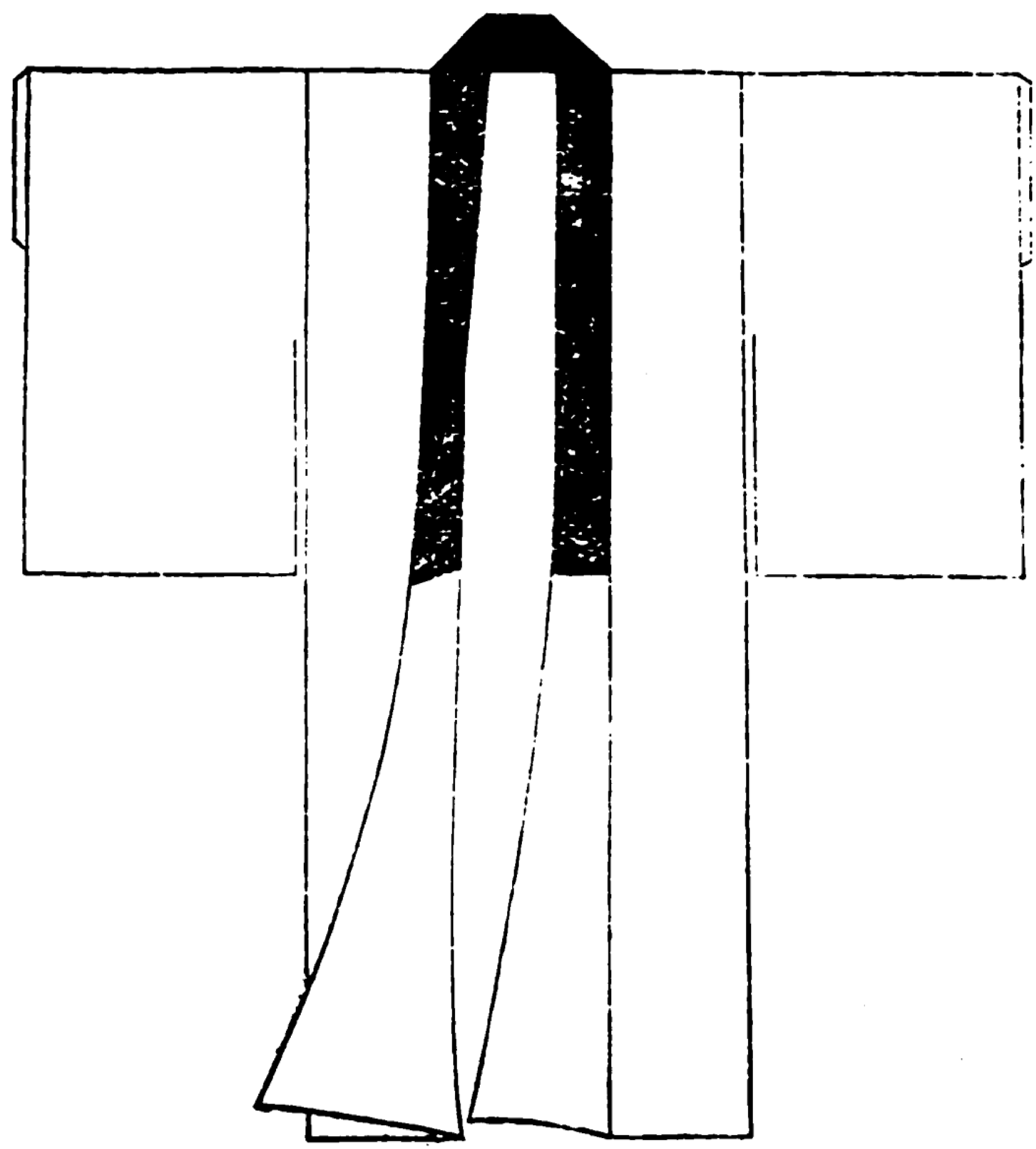
（卅二）その縫ひ方

ひとへ合羽ならば、單衣をぬひし如くに、袖と、脊と、脇をぬひ、裾ぐけをなし、前巾を定め、襟をつけてくけるなり。寸尺は、圖を見合すべし。但し、裾絎は一寸五分或は二寸ばかりにすべし。

また、袷合羽は、袷の衣服の如くに、袖を四つぬひいれき、それより見衣の裾を合せぬひて、袷羽織をぬふ如くに、脊と、脇とを四つ縫ひにして、襟をつけて、絎るべし。また襟を半合羽の如くにしたるは、此の次に示すべき半合羽をまちて知るべし。また、上より、ひもにて、はしよらずて着んと思はゞ、着丈をはかりて

縫ひ上げ。腰のほとりなる襟のはしの處へ、上まへ、下まへ、共につけ、また下まへの脇の表、上まへの脇の裏とに紐を付けるべし。それは着て、前のあかぬやうに、結ぶためなり。

女合羽縫ひ上りの圖



だいどころ

蓴菜

蓴菜のわかめをとりて、吸物のあしらひにしてよし、生のまゝにて、砂糖をかけて、食するも妙なり、すこし酢をかけてもよし、

さやゑんどう

さやゑんどう所によりてはかはゑんどうともいふ、煮て食するは常のことなり、秋の枝豆の如く、鹽ゆでにしてうまし、但し、ゆでゝ後に鹽をかけたる方、味よし、又細くうちて、ざつとゆをくゞらして煮肴などのあしらひするもよし、共にゆですぎそ色の赤くならぬやう注意すべし。

松露

松露、煮て食し、又吸物のしわらひにするは常のこと

なり、鹽やきにして、甚雅なり、之を青松葉にさして、八寸に盛りたるなど、殊に趣あり

牛酪の製法

皿の如き器に牛乳を入れ、其儘にて凡そ十二時間を經乳皮充分に浮ひたる頃、之を取りて（乳皮の温度は大略攝氏十二度乃至十五度を可とす）桶に入れ、能く蓋を閉ちて振り廻し置けは、三四十分を經て已に上澄の脂肪は、小塊となりて浮ぶが故に、桶を開き此塊を取り出し、之を合一にすべし。斯くして得たるものは、百分中脂肪六十乃至七十分と、三十乃至四十分の牛乳を含むるを以て、竹篦にて押し付け、牛乳を去るべし、然らざれど長く貯ふる能はず、牛乳を去りたる牛酪百六十匁に付、上等、食鹽五匁乃至十二匁を加ふべし之れ則ち牛酪なり。而して直ちに食用とするものは、食鹽の量五匁位にして可なるも、稍久しく貯へんと欲せど、十二匁位を和するを要す。

便輕スープの製法

夏向きは多量のスープを製り置かんには、忽ち腐敗するの患あるべし。斯る場合に、僅か十五分間に製り得べき便法あり。ろは、凡つ六人前のスープを製せんに、タピオカ（カタクリノ如きもの）に、胡椒と鹽を少しばかり加へ、水を入れて煮立、此に牛酪適宜、鷄卵の黄肉四個を入れて再び沸騰しめ、能く攪伴するなり。此くして得たるスープは、味淡白にして、殊に暑中の用に適すべし。又牛酪を好まざる人の爲に、麪包を極細く刻みて鍋中に入れ、又セルフオイスを細かく刻み、牛乳のクレームを煖め、匙に六杯許加へて、此に水を入れ煮立つれど、美味ものを製り得べし。

藁餅

藁餅の製法は、先づ藁の根際より葉末まで細かに切り（馬の飼料に供する如く凡そ一寸位）之に重炭酸曹達十匁（藁一匁に付）を加へ、[illegible]

片を混じて煮出したる上澄）にて凡そ十時間程煮沸たる後清水にて洗滌し、灰氣を脱して再び之を細末になしたる後、糯米二舛（或は一舛にても宜し）を加へて一般の餅と同樣に蒸して后杵にて搗揚ぐるときは、六舛に相當する餅を得るなり。此餅は少しく鼠色を呈せども、其味は通例の草餅より香はしく、消化も通常の餅より一層能しと云ふ。

漫録

子持巖

秋屋遊士

山の巓より貝類の化石を出し、海濱より草木などの奇物を出すは、人々皆よく見るところ、是等は地質人類學を研究するには頗る益あることとなるべし、余は地質學者にあらず、また人類の始源を研究するものにもあらされど、之を知るに由なしと雖も、此頃漫遊の途次、子持岩なるものを觀たりければ、令孃方に縁あるものゆゑ、一夕の話の種に書て寄せ、併せて愛見か、地質を研究する學科の一考に供へんとす。

子持岩は、諸令孃が夏の暑さを避けて、毎歳遊びたまへる、逗子より程遠からぬ、秋屋の里にあり、路順は逗子より葉山に至り、御用邸の前を拜して、長者岬なる長者園を過ぐ、此邊は右に江の島を眺め、漁る小舟、貝拾ふ蜑の子春霞遠く沖をこめて、松風そよく岸に、白波の打寄するなど、筆に載べくもあらず。左手の山々には、貴顯方の別莊あり、幽にして雅。行く人は殆んど畵中の思あり、此邊の景色を見つゝ行けど、大崩の里に出づ、大崩は古へ、北條早雲と、三浦義同と戰ひし古跡にして、斷岸遠く海中に突出て、緑を添ふる松は昔を忍び、潮の去來を春風にまかす、芭蕉翁の「夏草やつは者どもの夢のあと」げに此を過ぐれど、

粟津ならざるも、人々をして感深からしむ、大崩より數丁ばかり行けば秋屋の里なり、余路すがら、一茅屋に老夫婦の、圓き石を店前に積みひさげるを見て。此は如何なるものなりやと問ふ、老婦來りて。これは秋屋の子持石なり、一つ買ひ給ひて家づとにせずやと勸む、手に取りて之を見るに、何れも一二百目位にして、みな圓きこと、殆んど人工を加へてつくりたらんが如し、石の質は疎にして密ならず、地質學者之を見なば、定めて定說あるなるべし、余は餘りに珍らしければ、一顆を購ひ、更に老婦に。此石は何れより掘出すものなるやと云ふに、老婦答へて。此石は此浦邊の岩より生るゝなり、山より掘出す化石のたぐいにあらず、母岩より子石の生るゝは、期ありて、さながら人の分娩期の如し、其期節來らざれば、決して母岩を離るることなし、ゆゑに此地に遊べる人は、兒なき婦人の爲に、求めかへりて之を贈り、禁厭となすと、余は老

婦の話を聞き、其子持岩は何れにありやと問ふに、隣家の藪垣にそひて下り、海邊に出て行く數丁にして母岩ありと、敎に隨て海邊に來る、漁家の婦女等、海苔、若苔を拾ひて之をさらし、兒童は打寄する汀の邊に貝拾ひて、戯れ遊べり、之に問ひて白砂をふみて行く、大なる岩は處々にあれども、何れが子持岩なるを知らず、更に漁兒に尋ぬれば、此岩こそ秋屋の子持石なりと。岩の大さを見れば、高さ二間位にすぎず、老婦の云へる如く、其母石には、子石の所々に點出して、或は半身を現はすあり、或は全く產出せるの痕あり、こゝろみに其半ば現るゝ石をゆるがせども、容易に取り得べくもあらず、又は產出のあとを見るに、みな圓形にして、余が購ひ來りたるものに比すれば、決して人工にあらずして、全く天然のものと思はる、去るにても、如何なれば、かく此石のみ、子石を有するにやと、斯らの岩を見るゝ、[illegible]

友人戯に、此の隣の岩は石女なりと余も一笑せり。

子持岩は、其土質より見れど普通の粘土硬質にして、黒灰色を帯ぶ、岩上には樹木なく、また草を生せず、一に海中の礁石と同種なり、たゞ此海邊に於て、この母岩のみ兒を產するは、一に地質學者の教を待つの外なからじ、また試に其子石を砕きて之を見るに、其中に貝殻の相集まるを見るは、わたかも金平糖(菓子)の中に、罌粟粒のあるが如く、必らず、貝殻の化石を藏す、これまことに奇と云ふべし、余は友人と、暫らく岩の下にて漁兒を伴ひ、白砂の中にうづくまり、腰なる酒を酌かはしたりき、漁兒等余が兒石を持てるを見て、君らは子持石をめでらるゝなり、いざ別に大なる男兒石まいらせんと、余を誘ひて子持岩の傍に至るに、圓形の兒石重さ三四貫もありつらんを示しゝが、質は皆同一にして、さきの老婦が手に歸せざりしは、其重きが爲ならんかと、友人と笑ひ共に之を持ちかへらんとせしかど、二人して擧ぐべくもあらず、やむを得ず漁兒に賃など與へて去り、逗子より滊車にて家にかへれり彼の購ひ來りし兒石は、今に床の上のかざりとなせり、子持石は如何の地質なるにや、或は其兒石の圓なるは、海潮の激しく岸を打てるために圓形をなすか、去れども今は海潮は、彼の母石の腰に及ばず、まして彼の岩のみ兒石を出し、かつは石中に化石の貝類を含むは、また地質學上の一考にあたひすべし、讀者令孃、逗子に遊むゞ訪ひたまへ、避暑の時節は最早二三月の後にあり、余は、知らざる孃達に栞を贈るになん。

眞葛のおうな

瀧澤馬琴

眞葛は才女なり、江戸の人工藤氏、名を綾子といふ、性、歌をよみ、和文をよくし、瀧本樣の手迹さへ拙からず、父は仙臺の俗醫士工藤（本姓源氏）平助、諱は平、母は管原氏とぞ聞えし、先祖は別所黨にて、播磨の野口の

城主、長井四郎左衛門より出でたり、（長井の族なり、加古右京といふ、并に太閤傳大卜七、三木合戰の條にみえたり）その子孫零落して、攝津の大坂にをり、數世の後、長井大庵に至れり、是則眞葛の祖平助の父なり。大庵は醫をもて業としたりしかど、江戸に到りて紀州公に仕へまつりぬ。その子三人まで有りけるに、只武藝をのみ學ばせて子ありとだにも聞えあげざりしかど、ある時、公、ちかく侍らして。汝が齡既に四十にあまりたらんに、子ども兩三人ありと聞きぬ。などて家督を願ひ申さぬぞと問はせ給ひしかど、大庵はわとさかり額づく程に、はふり落んとせし涙を拭ひて答へ申すやう。いと有りがたきまで、忝き御意を蒙り奉りし事、身にあまりて覺え候へども、かねがね申しあげし如く、先祖は一城のぬしで候ひしに、たづきの爲にかく長袖になりたるだにも、くちをしく候ものを、子どもをすら親の如くにし候はんは、先祖へめいまくなく思ひ候へたて、[illegible]某一代の[illegible]仕まつり給

へかし、子どもはよしや浪々の飢に臨み候とも、武士にせまほしくこそ候へとまうしゝかど、公感じ思召して、さらば方伎は大庵一代たるべしと仰せ出だされて、跡をば武士になされたり、これにより、その長男は長井四郎右衛門と名のりたり。澁川流のやはらとりにて師の允可を得たれども、生涯事にあはざりければ、名をしらるゝよしもなかりき。次を長井善助といひけり、こはさし箭の射手にて、いさゝか世に知られたり、この同胞は、紀州に仕へ奉りぬ。平助は三男なるをもて、さのみはとて仙臺侯の醫師工藤某に贅して、そが養嗣にぞしたりける、されど亦平助も實父の志をうけ嗣きて、圓頂長袖の身たらん事をば羞ちしかど、侯に願ひ奉りて、俗體にて有りけれども、衛生の術にはおろかならず、思を蘭學にひろめて、發明する所も多かりしにぞ、その名も粗聞えたりける。かくて平助が子ども數人あり。長女は綾子所云眞葛是なり。次を工藤太郎[illegible]

りぬ、その次は女子、又其次も女子なり、これへもよすがもとめて、後いく程もなく世をはやうしたりとぞ。その次を工藤源四郎元輔とぞいひし、和漢の才子にて詩をよくし、歌をさへよみたるに、方伎も亦庸ならず、惜むらくは短命にして、子のなかりしかば、わづかに名跡の遺れりといふ、その次は女子にて、名を樗といひけり、こは越前の姫うへに、とし來みやづかへまつりしに、姫うへなくなり給ひしかば、比丘尼になりて瑞祥院と法號とり、今なほ鐵炮洲の邸内にあるべし、又その次も女子なりしを、ある醫師に妻せられ、こもまたはやく身まかりしとぞ、このはらから七たり、才も貌もとり〴〵なりける、そが中に乙のかよのみやけの御まへにみやづかへにとて、まゐれるとき、兄の元輔が後のをこたりをいましめて、よくつとめかし、ふた親のめぐみをおもふに、雨露のごとくひとしきをうけたる身の、心々にたがへるは、かの七くさてふ花のかはれるに似たりとて

れのがじゝにはふ秋野の七くさも
つゆのめぐみはかはらざりけり

とよみてとらせたりしを、後に綾子の傳へ聞きて、よくもいさめたるものかな、さらばその七くさの花にたゝへんに。藤たかまはかくはしといへば、太郎よ、その次なる女かほよければ朝がほ、その次はをみなへし、なばなはそこにこそをはさめ、越の御まへなるは、萩、乙子はなでしことなるべし、葛ばなはめつるばかりのものならねども、襟(葉か)のひろければ、はらからをさしたはふ子の上にしも似つかはしかるべくやと定めたりしより、物にはおや子を眞葛と唱へ、樗は萩と唱へ、祝髮の後は萩尼ともゑるしたり。かゝるめで度同胞なりしに、五人は命長からで、文化のすゑには眞葛と萩の尼瑞祥院のみぞのこりたりける、そが中に眞葛はいとをさなかりしころより、異なる志ありけり、

明和壬辰の大火の比、物のあたひのにはかにのぼりて、賤しきものはいよ〳〵窮すると傳へ聞きて、ひとりつら〳〵おもふやう、いかなればあき人の心ばかり鬼々しきものにはある、あはれ民の父母たる身にしあらば、かく淺ましきことはあらせじを、悔しくも女に生れたることよとは歎きたり、これよりの後、われは必女の本になるべしとおもひおこしつゝ、とにかくに身をつゝしみ、おのれをうや〳〵しうすることはさらなり、女子はおもてこそ、肝要なれとて、愛敬つきたらんやうにもしつ、又から文を讀みまゝくほりせしに、父いたく禁めて、女子の博士ぶりたらんはわろし、草紙のみ見よといはれしかど、源氏物語、伊勢物語などを常に枕の友としつゝ、とし十六の時はじめて和文といふものを一ひらばかり綴りたりしに。父の平助これを村田春海に見せしかど。いたくめでよろこびて、その師なくてかくまでに綴れるは才女なりといひしとぞ、みづからは只いせ物語を師として、綴りてけるに、褒められしことのけやけきに耻ぢて、このゝちは親にすら見せざりしかど、猶よくせんとおもひたり、その手迹はをぢなりける人瀧本樣の能書なりければ、手を學びて、大かたは極めたれども、五十ちかきころ右のかひなの痛むやまひおこりしより、物かくこともわかきときには劣り、目もかすむことゝ常になりたれど、細分のさうしは得よまずといへり、いづれも〳〵女の本にならんとほりせしに、日々のわざにして、何事にまれ、人のうへに就きて、心のゆく所を考へ果さばやとおもふ心もつきにけり、かくて弟元輔に四書の講釋といふことをせさせて、只一とたび聞くことを得たり、これにより孔子聖人の敎へは、すべてかゝるすぢにてこそといさゝかたのもしく思ひたり、佛のをしへもよくはしらねど、念ずれば必利益ありと思ひとりて、とし來觀音と不動を信じ奉りけり。これより先とし十六七よ

りしころ、仙臺侯の御たへにみやづかへにのぼせられし折、みやづかへはひとり勤なりと思ふころよけれ、いくたりの同役ありとても、勤むることはわれ一人なりとおもはゞ、うしろやすかりけれと覺期せしかば、傍輩にも憎まれず、人のおこたりを咎むる心もなくして、果して後やすかりしといへり、又をさなかりしころ、奴婢のおろかごとをするが、ものゝいひざまとけしきとにしらるゝをうち見て、あなおろかにも立ちふるまふもの哉、人にしらせじと思ふことを、なか〳〵に人しれかしといはぬばかりなるはいかにぞや、かく淺はかなる心もて、しのびあふものどもの後々まで、いかでか遂げん、慾にまよふものゝ心ばかりおろかなるはなかりきとおもふ程に、果してその事あらはれて追はれしものゝありしとぞ。かくてみやづかへの身のいとまを給はりて、宿所にまかりしころ、母のなくなりしかば、猶をさなかりし妹どものうしろ見をもしつゝ、内をゝさむることをさへうち任するものゝなかりしにより、三そぢをなかば過ぐる迄、人づまとも得ならでありしに、はらからのうちいづれまれ、國勝手なる人の妻とせば、元輔が爲によろしかるべしと、父のとしごろいひつれども、われ仙臺へ赴かんといふものはなかりしを、眞葛は父の仰にはもれ侍らじ、ともかくもはからせ給へといひしにぞ、あちこちとよづるもとめつゝ、當時勤番にて、江戸番頭なりし只野伊賀とて、祿千石を領する人の後妻にねにし定まりしかば、仙臺河内はせくらとて、仙城の二の丸に程ちかき只野氏の屋敷へ遣嫁せられけり、人あるひはこれを諫めしもののありしに、眞葛答へていはく、遠く仙臺へよめらせんとはりするは、これ父のこゝろなり、又遠くゆくことをうれはしく思ふは、子の心なり、なでふ子の心を心として、親の情願に背くべき、われは三十六歳を一期として死したりと思へば、うらみも

あらず、死してすぐせわろくも、必地獄の呵責を受べく。且親同胞にあふによしなかるべし。仙臺はもとも厭はしき所なり、且聲だみてむくつけきをとこにかしづき、詞かたきもなき宿を生涯うちまもりたらんも、地獄の呵責にはますことなからんやといひしとぞ、さてよしありて父平助も身まかり、眞葛の良人伊賀も世を去りて、前妻の嫡子只野圖書の世となりにたり、この家いとかたくなゝる家則多くて、傍いたき事のみなれども、繼母の事なれど、何事も得いはず、いとれろかなるわざかなと思ひつゝ、そがまに〳〵せずといふことなし。はしめ女の本にならんと思ひしを、得果さず、をのこはらからの世をもはやくせしことのかなしくて、よしやわが身れうなりとも、人に異なる書をあらはして、世にもしられ、乃祖の名をもあらはさむやと思ふに、ろの諸侯の多くは、財主の爲に苦められながら、嬖妾に費を厭ひ給はず、或はつか[illegible]

て、そがなかたちするものにはかられ、あたら黄金を失ひ給へることなどをはじめとして、經濟の可否をろうずるとも、數篇全書三卷を獨考と名つけたり、時に文化十四年冬十二月朔、眞葛五十五歳の著述とぞ聞ゆし、此記奥州ばなし一卷、磯つたひ一卷あり、予がこゝにしるしつけたるは、眞葛の予が爲に書きてれこし、昔がたり、とはずがたり、秋七くさ、筆のはこびなどいふ草紙の意をかけて、略記しつるものなり。予はちかきころまで、眞葛をしらず、文政二年巳卯の春きさらぎ下旬、家の内のものどものことしの始のことほぎにとて、やからゆきたりし日、齡五ろぢむかりなる比丘尼の從者ひとりいたるが來て、れとなふ有りけり、とりつぐものゝなき折なれど、うたもれかれずみづから出でて。いづこより來ませしぞと問ふに、比丘尼のいはく。あまは牛込神樂坂なる田中長益とい[illegible]

はしといひつゝにとりかゝりたり。予は文化のはじめより、客を謝し、帷を垂れて、常に人と交らず。をちこちの騷客のさはに來訪せらるゝも、舊識の紹介なれど、病に托してあはざりしに、ついでわろしとおもへども、せんかたのなきまゝに、いなあるじは、出でゝ今朝よりあらず、家の内の人どもいづちへかゆきたりけん、おのれはしもし留守するものなり、何事にまれ仰せおかれよ、かへらむ傳へまゐらせんと、帷光がはに答へたり、そのとき比丘尼は、ふところより一通の封狀と、さかな代としるしたるこがね一封と、ふくさに包みたる草紙三まきをとり出でゝこはみちのくの親しきものより、あるじにとゞけまゐらせよとて、おこしたるなり、草紙はをんなの書きたるを、こゝの翁の筆削をたのみ侍るとよ、猶つぶさには此ゑやうそくにこそあらめ、あまはこよひ田中がり止宿し侍れば、翌のかへさに又とぶらひ侍りてん、その折に一ふでなりとも、此かへしを給はれと傳へ給へかしといふ。予答へて、そはこゝろ得て侍れども、あるじはとし來筆とるわざに倦みつかれたればとて、いづ方よりよざし給ふも、かゝるものはうけ引き侍らず、殊更留守の宿なるに、あづかりおかば叱られやせん、又折もこそあるべきに、こはもてかへらせ給へかしといなむを、比丘尼は聽かずして、そは宣ふことながら、おん身の心ひとつもて、おしかへされんことにはあらじ、とまれかくまれあづかりてたべ、翌の朝は巳のころにまたこそ來めと、期をおして、いとまごひしてまかり出でにけり。予も亦書齋に退きて、まづその狀をひらきて見るに、いひおこしたる趣は、比丘尼のいへるにおなじけれども、ふみの書きざま尊大にて。馬琴様みちのくの眞葛とのみありて、宿所などは定かにしらせず、いぶかしきこと限りもなければ、ひとりつら〱おもふやう、此とし來あて人より書を給はりしことのあれど

も、かくまでに尊大なるはいかなる人の妻やらん、仙臺侯の側室にて、御部屋など唱ふるものと、はるぐとよざしぬる草紙は、何を書きたるやらんとおもへど、やがてまきの稿本なり、その説どものよきわろきはとまれかくまれ、婦人には多く得がたき見識あり、只惜むべきことは、まことの道をしらざりける、不學不問の心を師として、そうじつけたるものなれど。傍いたきこと多かり、はじめより俗工の手を經て、飽まで磨かれなど、かの連城の價にもおとらぬまでになりぬべき、その玉なしも玉鉾のみちのくに埋みぬることよとおもへど、今さらに捨てがたきこゝろあり、さはさりながら、人づまか母かもしらぬ一老婆の、その宿所だに定かならねど、需に應ずべくもあらず、いでやわが志を見しらして、その後にともかくもせんすべあれとおもふになん、その夜かへしをものするに。おのれはいとはやくより市とかくれて、をんなから

んべのもてあそびものとなるよしは、刀自にもしられたるなるべし、さぞれこたみよせられしれん作のさうしは、それらのすぢにはあらぬを、世の人のあれをしれるものと異なる見どころあるにあらずど、江戸には名たゝる儒者も、國學者も多かるに、おのれにはおのみ給はじ、さるこゝろもてせられなど、などていと尊大なる、およそ人にもの問ふには、禮節あり、いにしへの人は、一字の師をだも猶おろかにはせざりき、もしまことに問はんとのみこゝろあらど、かくはあらじを、馬琴とさへものせられしはいかにぞや、曲亭も馬琴も、予が戯號なれど、戯作、狂詩、狂歌などのうへにのみ交はる友ならど、しか唱へられんに咎むべき事にはあらず、もし實學、正文のうへをもて交はる友に、なほ曲亭とたゝへられ、馬琴といはるゝは、是われをしらざるものに似たり、いかでか予がこゝろに耻づることなからんや、

らざるなめり、近ごろ平賀源内が、儒學、蘭學のうへには鳩溪と號し、戯作には風來山人と稱し、淨瑠璃本の作あるには、福内鬼外としるしけり。又大田覃は、儒學に南畝と稱し、狂詩に寐惚先生と稱し、狂文、狂歌に四方赤良、四方山人、巴人亭、李花園などゝもしるし、晩年には蜀山人と號したれども、戯作、淨瑠璃のうへならでは、鳩溪を風來とも、鬼外とも稱するものなく、狂文、狂詩、狂歌のうへならで、南畝を寐惚とも、四方とも、巴人亭とも稱するものはあらざりき、よしやその著きをのみ呼びなれて、虚實の號を混ずるとも、まことによくその人をしれるものは、こゝらに心を用ふべき事歟。刀自はよく予をしらず、予は素より刀自を知らず、男女みづから授け受けざるは禮なり。刀自は人の妻歟、母歟、その宿所だもつゝみ給ふには、われ答ふる所をしらず、こゝをもて只わが志を述べて、おどろかし奉るのみ。と書きしるしつかはして、めのをんなを呼びて、翌の朝しかじかの比丘尼來つべし、あるじはけふもはやきに出でゝあらず、こはきのふのれんかへしなりと告げて、わたせよといふに、こゝろ得果て、しかはからひつ、このゝち廿日ばかりを經て、又かの比丘尼より御宰めきたる使をもて、みちのくよりの消息を届け侍るとて、おこしたるに、椿の尼としるしたる添ふみもありけり。まづ眞葛の狀をうちひらきて見るに、こたみはいとおしくだりて、ふみの書きざにのねもごろなりし、そが中によろづにおは〳〵しきをんなのよそをだに得しらねど、今はやもめにていとおよすけたる身にしあれど、をとこに物いはんにねもごろぶりたらんも、なか〳〵になめげなるべしと思ひとりしより、いやなしと見られにけん、露ばかりもそなたさまをあだゝどる心あらで、人には見せぬ筆のすさびを、たのみ奉ることやはある、この後とても、心つきなきこと多からんを、敎へられんとこそねがひ

侍れ、こなたのうへをしらせよとあるに、いかでかつゝみ侍るべき、眞葛はしか〳〵なり、又さきにわらはが消息をもて、とふらひ侍りしは妹にて、しか〳〵とろの身のうへをも妹 楞尼の名どころをも、つぶさに書きしるして、別に昔がたりといふ草紙一まきに、その先祖の事さへしるしつけてみせられたり。

汽車中の所見

春帆

私は此の頃旅行中に行き遇ひましたことのお話を致さうと思ひます。

アメリカ大陸の長い汽車中にては、色々面白い事に行遇ひましたが、其中で唯今お話を致さうと思ひますことは、シカゴを出立致しました時の事で、丁度日曜日の夜でござりまして、其の汽車がたいそう込みあつて、非常な混雑を致して居りました、[illegible]中に女も隨分乘つて居りました、其中一人の女が、ツイ手に持つて居りました紙入を下へ落しました、もとより混雑の中ゆゑ、容易に取り上げる譯に行かない、すると其の傍に居つた一人の男が、女の連でもないと見へましたが、其の大層な込合つて居る人の中を態々分て、やう〳〵腰掛の下の方から夫を拾ひ出して、其の女に渡してやりました、さうすると其の女が默つて其の紙入を受取りまして、有難ふと云ふ禮も一口申しません、さうして男の方では、其の紙入を渡しました後に、態々帽子を取つて、丁寧に頭を屈めて禮をいたしました、けれども女の方では、當前の事であると言はぬばかりで、ノサバリキツテ澄しこんで居りました、其の樣子と云ふものは、彼の國の人々では何共思はないか知りませぬが、私等の目から見ますと、其の傲慢至極な有樣は實に何うも見られたものではござ[illegible]

ます、兎角女尊男卑の國の風俗は、女子は非常に神聖な者で、男子は數等の下にある者の樣に成つて居ります、そこで女は勝手次第に威張て居る、又男の方では、勝手次第に女に威張らせて居るといふのか、先づ社會の表面の當前の事と成つて居るのでござります、尤も敎育のある上等な人たちになりますと、女でもさう無暗に威張て計りは居らぬと云ふ話でござりますが、偖て其の上等と云ふ者は、至つて少數な人でござりますので、中以下の一般の風俗は、先づ前に申した、滊車の中の女のやうなものでござります。

太平洋の長の船中も何時しか越へまして、なつかしき我國の滊車に乘りました時は、丁度花の盛りで、乘客の多い最中でござりました、あるステーションにて隨分に澤山な人が、私の居りました列車の中に乘込んでまいりました、其の中に隨分酒に醉つた二三人の人が、中々の勢にて、大きな群で話をなし、或は歌など唱ふてをります、そのうちに列車は次の停車場につきますと、其所からまた同車に乘り込みました女が二三人ござりました、其の女たちは折角乘りましたけれども、既に腰掛る所もないので其所に立つて居りました、さういたしますと酒に醉つて居ります議論好の人が、其の婦人の方を見て、如何にも氣の毒に思つたるやうすにて、己の席を立ちて、其の年の多い婦人に讓つて遣りました、さうして婦人の方では辭義を致してことはりましたけれども、遂にその勸によりまして席に就きました、かやうなることは敢てめつらしき事ではござりませぬ、けれども暫時かやうな風を目にいたしませぬ私は、此の有樣を見まして、忽前のシカゴの滊車中にてありたる事を思ひ出しました、あの紙入を落しました女の樣子の非常に厭嫌らしかりしことを。

我國にては、女の方で一向威張る事は無くても、男の方で相當の敬禮はいたします、その敬禮に對しては、

誠に丁寧なる御辭儀をいたすと申すことは、何うもなか〳〵立派なものであると思ひました、どうぞ此の日本の婦人の極く柔和にわつて、さうして實に禮儀に協つた樣子と云ふものを、彼の無暗に威張る女どもに見せてやりたいと思ひました。

男尊女卑と云ふことは、男が無暗に威張りまして、女は何處迄も頭を抑へ付けられて居ると云ふ樣に聞へますけれども、我國にては、決して女尊の國で女が威張る程に男は威張りは致しませぬ、男も相當の禮儀を以て、やはり女を敬禮いたして居ります、まことに結構な風俗でござりまして、櫻のうつくしきと同樣に、他に並もござりませぬ、何うか此の立派な風俗を何處迄もそこなはない樣に、能く保持して往て貰ひたいものでござります。

私はこの頃友人の許を訪ひまして、前に申上げましたる事を話しましたるところ、其友人は『最早追々要も散りさうで惜いものだ』と申してわとは何にも申しませんでござりました。

世俗簪の造始の事

柳原紀光

或人かたられし、今の世、をうなのさすかんざしは、享保のはじめまではなかりけりとぞ、それよりかんがふるに、繪草紙などを見るにも、その頃までは、かんざし髮搔のたぐひをすべてさゝず、しかれどちか比の物なるべし、又ふるき人のものがたりをきくに、享保の比までは、女のこどもなどは花すゝきなどのかたしたる白銀のかんざしをさしけり、志かるに御厨子影故若狭守宗直わかゝりしより、好事のものにて、みゝかきをろのはなのうへにつけてつくらしめ、かんざしみみかき、通用たよりありと思ひて、人にれくりしに、

へ、色々このみをくはへ、今は貴賤となく、しろがねにてつくりて、さしもてあそぶ事にはなれり、それかんざしは、髪のかざり、みゝかきは理髪の具のうちなり、そのへだてをわきまへず、たかき人の用ひらるゝはくちをしき事なり、宗直は時の興にてやつくられしならん、しからざれば遠きおもんはかりなしとやいふべき。（閑窓自語）

身の不徳

壚井ふく子

我とわれ養ひがてに思ふこの身を親々は如何におぼしけん。妹の少しにても女子のふしにかけし事あれば、つゆゆるし玉はず、そをべんじなどする事あれば、よし〳〵、愚なる母にてよく習ひおきぬ、今にしも姑御に逢ひ奉りし折りもかしこう口答へして、七去の罪人となり、母のはぢをあらはしねなどと、母なる人のこ

らし玉ふ事一方ならず。また嫂なる人が、すこし足らはぬふしあらば、彼は何ぞや、我子の後見をさすべき大事のものを、何とて教へぬぞとて、父なる人の、いつも母上をせめなどせらるゝに、己れは過ぎたる事、及ばざるかどのみなるを、父も母もつゆとがめ玉はぬは、とても朽ちたる木、雕るべからずと、思ぼし玉ひてにや。我ながらわけなき事よと思へど、ともすれば、嫂なる人をわづらはせ、妹を叱りちらしなどするに、あな吾理なる道理よなどとてほゝゑみてうけ流す姉、妹、さては敬して遠ざくるにや。よし〳〵おろかなる身さやうにみなみすてぬ。露霜は外にたくがわりとて、師の君の元に行けば、思ひがけずよみてし歌などに、言の葉をそへられて、ほめなどし給へど、我ながらあさましと思ふふしは、あながちに仰せられず。論語はよみたりや、未だにか、さらば教へやらんとの給ふまたうちきくに、我ながらはづかしうて、おぼえず顔も

わかうなりなどするに、此の書は如何にぞや、げに道理つくし、皆ならずや。今よりは論語を知らずと云はさじなどと、たびくの給ふに、いやはづかしく覺ゆるふしぞ多かる。さても、此のやうに文につけてのみ誡め給ふは、己れ過を聞くをよろこびざる性のあらはれて見ゆるならん。されど糞土の牆とさへもの給はさぬ我は、如何なる下愚ぞや。

落花（五）

柴田千稻

第六　許してくれ

物事に哀れなる秋も遠く去り、寂しき悲しき冬も又別を告げんとし、逆に吹き捲きし木枯も、長閑なる春のそよ風に變らんとする此頃、渺茫たる野の盡くる所に、突兀として雲際千里を睥睨する筑波の峯も、漸く緑の色をまして、其腰には薄き霞の纏ひろめ、やがて轉ずる鳥の聲も樂しげに、若草摘む子等の唄ふ聲も面白く、人目も木芽も春の萌え出づる此處の岡の元なる庵は、暫く平安なりし樂を破られて、又もいと慘憺たる境遇に沈みけり。見よ涙を包みて古びたる火櫃の前に藥煮るは皐月にあらずや。あゝ世は何故にかく罪なき人を逆境に陷らしむるを好むか。圓滿なる月もやがて缺け盛なる花もやがて移ろふは、これ世の習として敢て怪しむに足らず。月も花も既に一度圓滿の時あり、盛なる時ありしなれど、又何をか恨み何をか悲しまん。されど尙惜といひあたらしと嘆くにあらずや。況して圓滿ならざるに缺け盛ならざるに移ろふ、世の事之より悲しきはなく之よりいとはしきはなからん。皐月は先きに重なり來る悲嘆と災害とに堪へ兼ね、既に其身を殺して其苦痛をのがれんとせしが、偶々一旦決然として愛憐の羈絆を切放ち、袖を拂つて立去りし親家が後を氣遣ひて歸り來りたると思ひ、漸く其沈淪より

拯ひ上げられ、且つ相共に暫く此庵に住ひなし、時は秋なるに冬なるに、楽しき胡蝶の夢をたどりて逆捲く荒風の外に立ちしを、花に風あり月に雲あり、アヽ人生は脆きもの哉親家は冬の半頃より、一度癒えし金瘡の俄に再發して、滿身熱氣に浸たされ、或時は身を燬くが如くにほてり、或時は恰も氷の如くに冷え、熱の出入日に幾度と云ふ事を知らず、流石に美々しかりし容顔も酷く蒼ざめ、漆の如くなりし髪も茫々と伸び擴がり、身體は見るも哀に痩せ衰へたれど、精神のみは益々堅く益々亂れず、常に腕を扼して其身の云ひ甲斐なきをかこち、歯を嚙み鳴らして血の涙を絞り、折々は衾を蹴つて蹶然として起ち上れど、悲しや力衰へ腰折れて一時もたまらばこそ、後に撞と倒れたるまヽ身をふるはして空しく天を睥睨む。

此有様を傍に見て看護する皐月の心は如何ならん、胸も湧き返り心も消え、肉は裂かれ骨も刻まるヽが如く覺えて、身も世もあらせず泣き悶ゆる事もありき。さりとて心の悲みを表に顯さず、詞には兎に角にと云ひ慰め、顔を外向けて密に湧き出る涙を押拭ふ其哀れさ。まして朝に夕に眞心を捧げて神に禱り佛に念じ、一日も早く一時も早く癒やさせ給へと、ヒシと兩手を合せて俯し拜む心の底を、神佛も如何で哀とればさゞらん。況んや夫親家は如何で其優しき心根を知らざらん。善くろの眞心を汲み知りて、之が爲に愛憐の涙を注ぐ事は幾度か、夜更けて萬籟眠に沈みたる時、熱沸らぎて人心地付きし頃は、夫親家は、夜もすがら眠りもせで看護する妻のうるみたる顔をつら〳〵と打護り、心の中に獨り悲み獨り憐み、熱き涙は常に其枕紙を濡せり。

アヽ思へば哀れなる妻の身哉。我と御身とは如何なる惡縁にかつながりけん。アヽ不幸なる我身に縁の糸を引きて、其身は我よりも一層深き不幸に陷り、あまつ

さへ殘忍なる叔父に苦しめられて、あらゆる辛苦を嘗めつくし、漸く此身に廻り逢ひしを、我身は義の爲に此の恩愛を斷たざるべからず、涙を飮みて御身を棄てざるべからず、御身は又獨り淋しき庵に音を鳴く虫の露に枯るゝ身となれり。されど我は此庵を出でゝつらつら思ふに、其許の今の氣色今の振舞は、必らず生きては世に存ふまじと決したるが如し、身を殺さんと思ひ極めたるが如し、死を決したるを顧みざるは鬼か蛇か、それと知りつゝ何見すてゝ去らるべきか、死ぬるを傍觀して去らるべきか、笑はゞ笑へ謗らむ謗れ、如何にもして御身の死を留めざるべからす、よし暫し其有樣を覗はんど、庵の後に身を潛め、幸にして惡漢の手より拯ひしが、流石の我身も再び其方と離るゝに忍びず、其方を獨り庵に殘すに忍びず、遂に我心も折れ氣も緩みて、共に暫く此處に忍ぶに至りしが、未だ程もなく、我身はかゝる病に倒れて、又も其方の身を苦しましむるに至れり。あゝ其方と我身とは如何なる惡緣なるか、其方は生れてより此身の爲に辛苦艱難の凡てを嘗め盡くせり。如何なる因果ぞ如何なる因緣ぞ、許してれくりやれよ、我妻皐月、我身は必らず忘れ申さぬを、喃と、心中の苦悶表に顯れて思はず長き息をはつと吐けば、皐月は躙り寄りて氣遣しげに差し覗き、如何遊ばされしぞ、苦しうれはしますか、痛み申し候ふか、去むし摩り候はん、いざ許させ給へよと、衾を少しく避けて、脊を摩らんと靜に手を差入るゝを、親家は其手を固く握り緊めて、涙をはら〳〵と落し、許してれくりやれよ、喃皐月、云甲斐なき此身の爲に、いかに辛苦を嘗めて、そを辛しとも思はず苦しとも思はぬ其方の眞心は、骨身に刻みて忘れは致し申さぬぞ。假ひ死すとも忘れは致さぬぞ。アゝ何とて天も地も心優しき其方を苦しめ給ふか。それにつけても此身恨めしや、此身に病だになくぞ、其方に悲しみはかけまじ

さとと、於夫の心も流石悲歎に流れて、咽も枯れて聲も曇り來るを、妻も慰め兼ねて、握りたる其手と手との上に顔を押あてゝ、潸然として泣き伏したり。夜は沈々。

第七　脇腹グサと一突

かくて親家の病は容易に怠る氣色も見えず、神佛の御加護も及ばざるにやわらん。涙を捧げ血を捧げて朝夕に乞禱む皐月の眞心もあはれ水に浮ぶ泡沫と消えなまし。空は彌生の柳も櫻も長閑なる春風に誘はれて、錦織りなす彼處の丘此處の山、花曇る中天に羽を伸して樂しげに謠ふ雲雀の聲、角ぐむ若葉青氈を引延ねたる若草、さては絲遊の懸りたる麥の波の靡きたる、何れか樂の種ならざるべき、意馬は浮れ狂ひて瓢箪の尻輕く、廣き此野原に髫髮の唄ふ歌の聲も長閑に響きぬ。されども悲哀慘憺の雲に包まれたる此庵には、春の光も照らさず、春の風も音信れず、アヽ病に呻吟く人袖に涙を包む人、これも皆全じ世に生れ全じ日の光の下に生活するものなるを。

皐月は心を決して親家の眠りたる日間をうかゞひ、晝とも云はず夜ともいはず、天神の御社に詣でて、我身を殺して夫の生命に代らんと禱り、熱き涙を揮ひて額づく神の御前に、ヒラ〳〵と散り來る落花二瓣三瓣、哀れや其祈る時の彼の心は、如何に切にして如何に悲しからん、アヽ此貞實なる少女の眞情を神は如何に聞き給ふか。

或日例の如く夫の寢息を窺ひて密に出行きしが、其歸り來る時は常に似ずいと慌しく、足も空に走り來りて寢たる夫の枕元にむつたりと坐り、何思ひけん其寢顔をつく〴〵と打護りて潸然として涕泣せり。落つる涙は雨の如く親家の顔に降りかゝりぬ。氣付きて慌てて拭はんとせし時、親家は如何なる夢に驚きけん、俄に呻吟きて仰向に寢返り、眠りたる目を見開きて珍ら

しげに邊りを打見廻し、大息をなしつゝ、アヽ夢は五臓の疲れとは云へ、怪しき夢を見たることかな、かく云ひてやがて皐月の顏を打仰ぎ、眉を片寄せて、喃皐月、何と致し申したるぞ、何が悲しうて御泣きやるぞ、氣遣しき事のおぢやつてか、心元なし、喃何を御泣きやるぞと、何時に似ず、皐月の氣色の平生と異なるを怪むは、胸に思ひ當る事のあるにやあらん。

皐月は幾度も涙を押拭ひ、つら〳〵思ふに、今此處に涙のもとを云ふはいと易けれど、云はゞ必らず夫の心と痛ましめん、さらぞ隱さんか、如何で知れざる事のあるべきぞ。知るゝと知りて隱さんは夫を欺くに似たり。云ふべきか云はざるべきか。とやせん角やせんと、稍く躊躇ひしが、やがて鼻打かみて聲も細く、何を致せしと申すに候はねど今里人の話すを聞き候へども此邊りに戰の初まり申すとの事と、皐月の詞の未だ終らざるに早や親家は眼を瞬りて、俄然褥を跳返し、身を飛へして躍り上らんとしたれど、アハレ五体は痛み骨は摧くるが如く、氣抜け力枯れて撞と倒れ、驚き走り寄りて勞はる皐月を屹と見て、い……いくさとは、な……なんの戰ぞ、早く申し候へ、喃皐月と、睜りたる兩眼に千條の血筋を漲して、黑髮をおどろ顏に振亂し、何の戰ぞ、皐月、は……早く申し候へ、喃皐月、何の戰ぞと息せき烈しく問ふに、皐月はおろ〳〵其膝に取縋りて、よくは存じ候はねど、に……新田の公達の御旗上げとか、に……田の公達の……と一聲呼びて、握り詰めたる拳に疊を丁と叩き、チエッ無念といひさま、纒はる皐月を排ひのけて、忽然起ち上り、枯木の如き足を蹈みしめて驅け出んとせしが、疲れたる病には勇士も敵し難かり、逸る心のみは胸中に湧き返れど足は意の如くならず、思はずたぢたぢと、よろめきよりて又どつさりと倒れ、く……くち惜、無念と、血を吐[illegible]

し、足をしどろに踠きて暫し倒れ伏せしが、やがて決然として顔をあげ、匍ひ寄りて枕邊に置きたる太刀を握り執り、ろを杖として又も漸くに立上り、涙を揮ひて引留めんとする皐月を叱し、常々云ふは此事なるわい、れのきやれ、妨げ致すまいぞ、我死ぬる時の來甲した、今迄をめ〳〵と存へ居りしも、かゝる時一刀敵に報いんとする爲なるわい、さ、れのきやれ、れいと、刀の鐺に皐月の肩をハタと打ち、二歩三歩歩みたるに、悲しや息迫り眼くるめき、足もしびれて堪らで ころ、又腰を折りて後に撻と横はりぬ。滿身の血はみる〳〵面上に逆登り來て、やつれたる顔は紅を染めたる如く、朱走りたる眥 を抉して吐く息はさながら焔の如し。皐月は其袂に縋りて、よゝと泣き倒れぬ。暫し經て親家は顔を擡へ瞼に宿りたる涙を拂ひ、亂れかゝりたる髮の毛を搔遣りて、屹と居住を正しうし、兩手を懷に差入れて身を反らしつゝ、天を仰ぎしが、やがて其瞑りたる眼を閉ぢて暫らく默然として動かず、恰も死たるが如くに、呼吸も其咽を通はざるかと疑はる、室の中は寂寞たり。皐月の欷歔する聲の聞ゆるのみ。

かくて親家は差し入れたる兩手を伸して、肌れしひろげ、俄然傍の刀を引寄せてすらり拔放ちぬ。皐月は愕然として顔を擡げぬ。吐嗟必死の聲を絞りて親家の手に縋り、其刀を挈ぎ取らんとす、物に狂はせ給ひしか、御自害とはれなさけなし、暫し、暫く待たせ給へ喃、暫し此刄を放ち給へ、我夫、喃我夫と、刀と親家の身との間に全身を投げて暫し爭ひしが、親家は再び聲を震はし、女々しうれおちやるは、放ち給へ、ヱゝ放ち給へと申すにと、押せども引けども縋りたる手を放たでころ、女の一念中々に侮るべからず、流石の親家も爭ひ難しと思ひけん、少しく其手をゆるむれど、皐月は嬉しやと力を籠めて漸くに奪ひ取り、はつと息つ

きて其の刀を後に隱さんとなす刹那、ツッと膝を進めたる親家、石火の如くに皐月の右の手を引寄せ、其の手に握りたるまゝの刀を、我が脇腹にグサと透しぬ。皐月は轉ぶが如くに親家の膝の上に倒れぬ。悲み極りて聲も立てえず涙も出でず、親家はたちたる刀をさゝへて何をか云はんとせり。濃き紫の血は迸り出でて倒れたる皐月の滿身に溢れかゝりぬ。

女子のたしなみ

塩井ふく子

能ある鷹は爪をかくすといへり、己れ德あるもへりくだれば、ますく\その德の高きを見る、人をばみだりにあなどりまたは笑ふまじきものなり、もしみだりにさる事をせば、中く\に己れ至らぬふしの見えて、はづかしく覺ゆる事多かるべし、古し小式部の內侍、僅九歳ばかりにて歌もよくよみ、宮の歌合せなどにても

じらひ居りしに、人々皆其母なる和泉式部がよみたるものなりとて、小式部のと信ぜざりけり、ある時母の式部、丹後へ行きてありけるが、定賴の中納言たはむれに、小式部の內侍に向ひて、歌合せの日も近寄りたるに、丹後へつかはしける人は歸りにたるやと云ひ入れて、局の前をよぎられけるを、內侍簾より半ば出でて直衣の袖をとらへ、

大江山いくのゝ道のとほければ
　まだふみもみず天の橋立

とよみけるに、定賴思ひがけずあさましくてはいかにとばかり言ひて、かへしもえせず袖をひきはなちてにげられしとかや。

德山の城主毛利元次に、一人の姫君ありけるが、その年わづかに七歳なりしほど、慈母を失ひしに、乳母腰元など、ともすればその幼少なるをあなどりかるんじて、我儘なる振舞多かりけり。姫君の乳母と

請ひて、細き針百ばかりをもとめ、よろこびて室に至り、娘婢等のかずの如く四十二本をとり出でゝ、香のものにうちまぜさせ、さて人々をよびつどへて之れをのめよとのたまひけれど、人々はおどろきあきれ、いかで針などののまれんとていなみたりしに、二度三度をし返してすゝめぬ、女どもいかりて、わかぬ事をのたまふものかな、このやうなる事強ひて仰せ玉ふならば、大主に聞えまつらんと言ひしに、些細のものなんでう呑むに難からんやと、なほ重ねてすゝむるに、人々は固くいなみて、はてはいかりなどす。姫君はほゝ笑みて、針は小なりとも呑むべからず、さるに、汝等我を幼少なりとて、毎々あなどりかろんずるは如何にぞや、たとへ幼稚なりとて主君なり、他日もしつゝしまずんば、我自ら嚴君に聞えまつらんとて、いとおごそかにの玉ひしに、女ども大におそれ、述べん言の葉も知らでありけるが、元次をりふし室に入り來りて、事の由をきこしめし、その人にさとし之れを謝せしめしとか。

或人加賀の千代をあなどりて

名木の中にまぢわるぎよう〱し

と言ひたりしに、千代はたゞちに

ふるつたあとで匂ふ茶むしろ

と下句をつけ、あるはどうしてもといふ題に、

どうしてもお月の笠にひもかなひ

など、さらくによみしに、あなどりし人、大にはぢて歸りしとか。これらは人をあなどりて、反て己の恥をさらしゝためしなり、自ら侮りて人之をあなどるとは古人の名言なるが、今一轉言を下して、人を侮るは自ら侮るものなりとやいはまし、また萬の事、なかぞのみ聞きて、みだりに笑ひなどすべからず、むかし花園左大臣の家に、始めて參りたりける侍の名簿のはしに、能は歌よみと書きたりけり、さて秋のはじめつか

た、大臣南殿に出で、、はたをり虫のなく音をめで、れはしけるに、暮けれど、下格子に人參れと仰せられけれど、藏人五位たがひて候はずとてかの侍來りたりけり、大臣よき折からと思召して、汝は歌よみとな、このはたをりを聞くかや、一首つかうまつれと仰せられければ、青柳のよふみかけたりしに、ありし女房ども折にあはずと思ひ、いたく笑ひたりければ、物を聞きはてずして笑ふ事やはとて、大臣はせいし給ひ、とくつかうまつれとありしに、

青柳のみどりの糸をくりおきて
夏へて秋ははたをりぞなく

とよみたりければ、おとゞ感じ給ひて萩おりたる御直垂をとらせ給ひしとぞ。

寛平の歌合せに初雁といふ題にて、左の方にありける友則卿、

春かすみかすみていにし厂がねは
今ぞなくなる秋ぎりの上に

とよめりけるに、上の五文字を詠じたりける時、右の方の人々こゑ〴〵に笑ひけり、さて次の句にかすみていにしといふに及びて、はじめて聲もしづまりにけりとか。

蜀山人ある大名に招かれ、時鳥の狂歌をよめと仰せられしに、法性寺入道が讀まれたる、かの百人一首にある處の歌の

時鳥なきつる方をながむれど

と言ふ上の句を、三度ばかりをしかへして歌ひたりしに、ありし女房ども古きものをと思ひ、たかしがりて皆顔を見合せて笑ひどよめきたりしに、山人はあきれてたゞながめ居りしが、やがて人々の笑ひのやゝしづまりし頃、

たゞあきれたるつらぞのこれる

と、下の句を言ひたりして、女房ども皆はぢてこめて

をも上げざりしとぞ、げに人を侮りて反て恥をさらしつる例、既に多く、事の終りまで聞かざるに、輕く笑ひて、反て面目を失ひし例も亦いと甚し、わきて女子は優美をむねとするものなれど、よく心すべきことにこそ、かく言ふ己れも心至らず、よく末をもしはからず、人のものがたりの初めをのみうちきゝて、わらひなどして後にはづる事の多かりしかど、後車のいましめにもとてかくなん。

藤の花

草の屋主人

櫻は散りはてゝ、春もおぼつかなき昨日今日、かつがつにほふ花の中に牡丹、山吹、藤の花。牡丹は、花の王とさへいふなれど、唯あはらかなるがいみじきのみにて、さして取り立つべき見所もなげなり。山吹は、みの一ッだになしといへど、何となうはかなげにもきこゆれど、花の色の清らかにやさしう、妹に似るといふ名もゆかし。

藤は、殊に見所ありげなり。藤なみとさへいひて、去なやかになよ〳〵と、やさしう咲き靡くも、手弱女の心地して、あはれなれど、こ紫の色ふかくにほふは、げに、かざさば、わがもとゆひの色やうつろふらむ。山の端に咲きなびきたるが、夕日に照りかゞやきて、紫の雲とたなびくは、花の霞にめかはりてあはれなれど、水の邊に咲きなびきたるが、朝風に吹き亂れて、白波紫の浪の岸を越ゆるばかりに見えたるも、けしきあり。

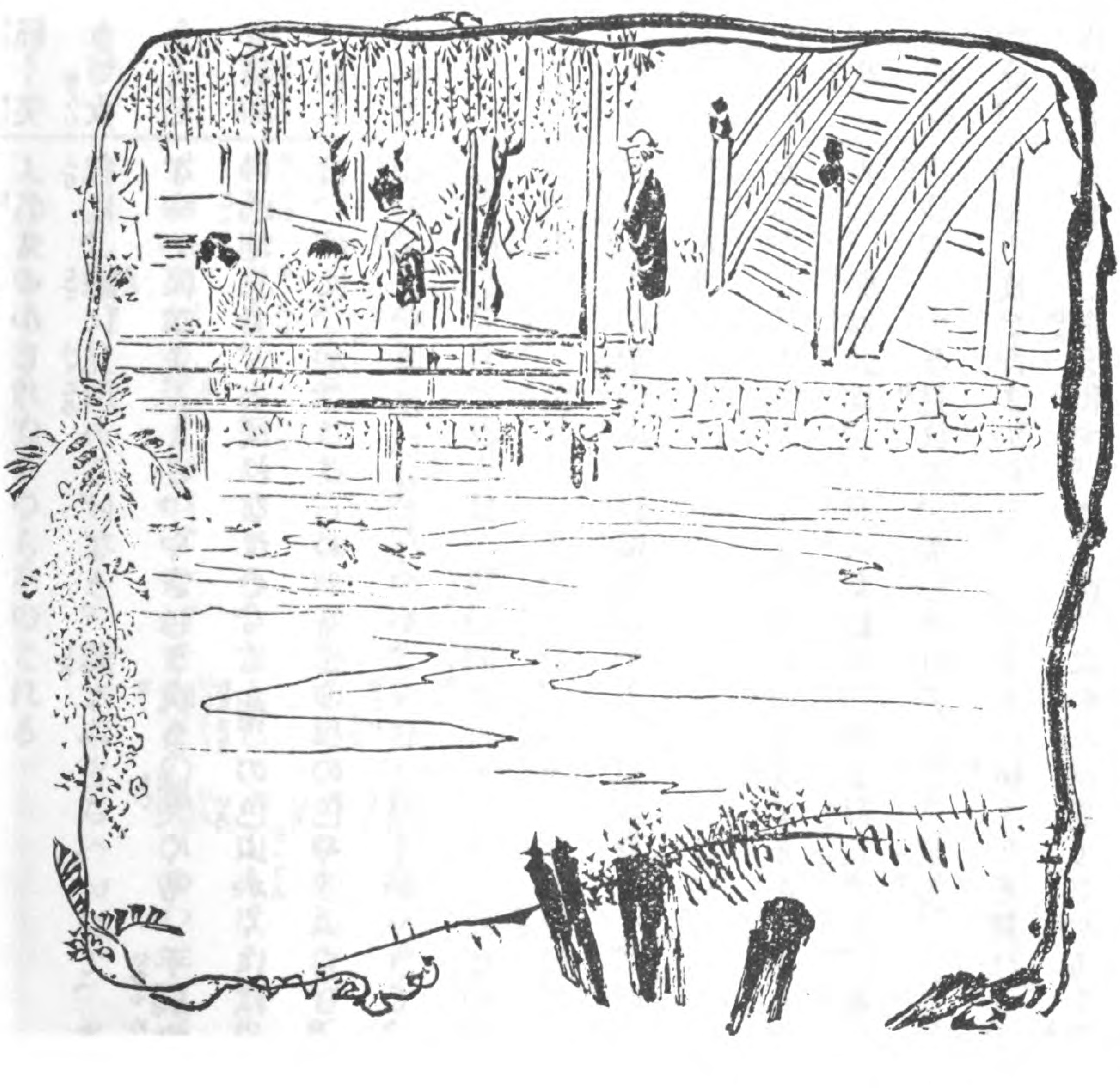
たゞ、こと木にたよりて、その身を支ふるが、いかならむ。樂翁公は、花月の草紙に、藤を品定めて、藤の花は、ちから見れど、美しけれど、餘りに近づくれど、かをりはまたよからず。はなやかに咲くかと見れど、末までは開き得ず。ことに、おのれひとりさかりを見

することかたく、かならずこと木によりて、たけ高き勢ひ見するが、そのよりそふ木の枝もはも見えぬ計りにおぼひぬれど、その木も遂に枯れぬるにぞ、われ一人りの心だへ見えて、木だかく咲きみちぬと思へど、嵐などにあふ時、もとより枯れし木なれど、うちたふれてけり。高う見えしはなも、つひに草むらにうづもれて、また見る人もなし。代々の小人の情態にもたとへつべしといはれたるが、さはいへ、そのこと大に、かりてさくも、大炊の御門が

　年ふれどかはらぬ松をたのみてや
　　かゝりそめけむ池の藤なみ

とのたまへるやうに見たらむには、なか〱に、心ありげにおぼえて、いとやさし。

都の名所には亀井戸の天満宮、池をめぐりてゆけど、紫の波間をわくると見るも面白からむ。



白魚女史

ふしわびぬ、臥しわびぬ、げに秋の夜はふしわびぬ、靜子、心地は如何にぞや、御身につげて、たゞし心をやらんと、あさまだきより、おどろかしにきにたり。さるにても、御身の髮のあまりなるみだれ方や。かくては、いよ〳〵心もむすぼゝるらん。とかしねさせんとて、かづ子は、甲斐〴〵しく櫛とり出でゝ、妹が鬢をけづりながら、頭のいたみは、まだ去らでか。明日にもよくならんと醫師は云ふに、憎きいたつきや。いとしの妹をど、いつまでもわづらはす事ぞなど云ひつつ、よき程にとかし終りて、またもやめづらしからぬ事を聞ゆるやうなれど、妾が思ふ人、のう、そちも知りてなる松丸君、ほのかにきけど、彼方によき人のありとかの事に、少しは心もうしろ安ふて、昨夜はねぶりさへもよふされしを、あやにく野邊の男鹿に呼びたてられて、またもや思ひあかしたり。はづかしとも、はしたなしとも思ぼされんが、おろかなる女子心に、つひ忍びかねて、言葉にも出づるは。御身をおきては、母様あれど、若き方のやうには、心安からず、つひ〳〵御身にのみもらしぬるはとて、流石に面をつゝめど、妹も、また思はず顏をあからしつ。はては、露か、村雨か、はら〳〵とたゞみをうつ音はげし。

姉は、やゝおどろきて、あな、さても、けしからぬ我身や。如何に妹なれどとて、心やすしとて、わづらふ人に、いやも露をそへたる心なさゝゆるしてよ。されど、妹。よき人のありと云へど、中々に心安し。御身は、あさはかなる姉には似玉はねど、こがるゝ人などは、あらんとも覺えねど、されど、また梁鴻の如くかしこしと思ふ殿はありてならん、云うて見ずやと、言の葉をさへかへてとへども、例の口なしの、いはぬ色に、ふかく袖にかくすのみ。孃樣、母御のめさせ玉う

てなりと、かしづきの告げに、何ならん、さらば、ゑむし、妹、やがてこむ。うるさからんが、後までに、その人を見つけておきねよ。必ずよとうちほゝゑみながら、かづ子は、いそぎ母の方へとゆきぬ。

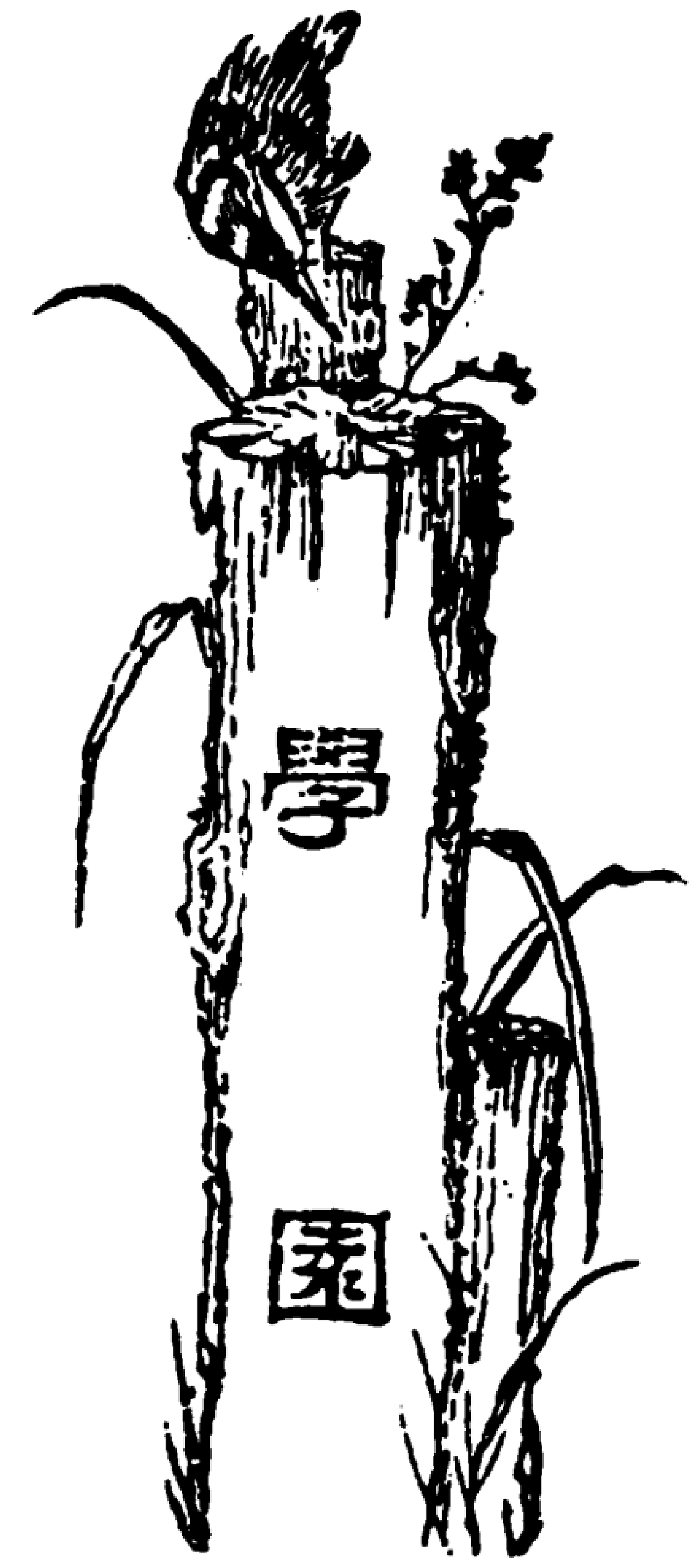
母親は、何か思案にしづみて、かづ子がとふも、ゑむらくは言葉なく、膝のもとにひらきありし文をば、手にとり上げ、幾度か、くりかへし〴〵見て、また力なくおきて、つく〴〵とうちながめ、ふとき息をさへつかれて、わな人もをし、人もうらめしの世や。かゝるとき、我夫の居まさば、思案もあらんに、のう、かづ子、我子をわずらはさじと思ひて、いつぞや人よりおこしたる文。かたくひめて、昨日も、一昨日も、よべもよもすがら、ひとりばかりに、とやかく思ひ案じてのみありしかど、心のいやみだれ行くばかりにて、分く方のなさ。其方は、如何に思ふぞや。讀みて見ねど、母がさしつくる文。かづ子は、何事にかとよみ下すに、

人も知りたる貴族の若殿、わかけれど、威も、勇も、かつ學才も、秀でたる、あつぱれ後には、如何なる名將にかなるならんと、陸軍にても、いとはやさるゝ武夫と云ふ、日來は虎狼をも、ひしがんずる武き武士なるに、如何にかしけん、この頃、名もなき病にかゝりて、身もほそ〴〵と力もなく、病の床に臥ししづませらるゝ由。花の雫をくめば、御方の一姫、一子殿を、はの三日月の影に見てしより、あはれなる色香の身にしみて、深くも思ぼししめける露のつもりて、かくはおきも臥しもわび給ふとか。母御のきかせ給ひて、妾になかだちしてよとおたのみなれど、定まる殿御のまします事を、かねて知れるまゝ、叶はぬよしを、申ししに、玉の緒もたえねとばかりにうちかこたれ、されどたえもはてゝや、糸より細げに身もほそらせ給ふを、白銀にも黄金にもまさる子寶を、如何にかしてつなぎとめんと思ます母御の御心のいとをしさ。玉と云ふ玉、



花と云ふ花、其處に此處にもとめ給ひてあれよこれよとすゝむれど、あだし人には心もうつらじとの、あくまで深き御心。如何なるゆかりにか。あたら大丈夫を、夕べか、朝か、露と消さんが、いとをしさに、一筆をかくろめ來らするど、母のむかしの友達よりの文なるに、かづ子はおどろきて、とかくの答もなく、魂魄も消えんばかりに思ひ沈みたり。

道理ぞ〳〵、なげくが道理ぞ、されど、かづ子。きけば松丸ぬしには、播磨のよき花に心をうつしろめらる由。いつぞやも聞えつるが、さやうなるうつろひ安き花ぞめの人に、行末をまかさんは、覺束なし。父君のいひなづけ給ひにたる君にはあれど、さやうのあだし人を、我子のむことせんよりはと、此母は、とかくに、心の深き方にひかれてぞ。ろちは、定めて、さは思ふまじけれど、御身の行末のため、かつは、人をも救ふ道、何事もおのづからにゆかりはあるもの。さても〳〵、此頃の我が心のくるしさ。かづ子のいたつきと云ひ、泣きてのみなる物思ひ、察してよとて、またもながめらるゝに、見上ぐれば、げに、御髮もみだれ、頰もこけ、額にも、年浪のとみにまさりたるげ、蝶花とめでらるゝ親に、子はなぐさめもせで、なげきのみをかくるよと思へば、千々にみだるゝかづ子の心、身の二つあらばとばかりに、なげきかなしむのみ。せんすべも、答へん言も、なほ知らず。



日本文典（九）

鹽井正男

動詞の自動と他動との區別は、前號の末に、かつ〳〵

述べたるにて、承知せらるべく、又「おしはかる」或は「生ひ立つ」などいふ動詞の如きは、元來二個の動詞が相連合して出來たるものにて、一種の動作をいふにあらずして、連合したる思想をあらはすやうなるものあり。「おしはかる」といへば「おし」といふ動詞と、「はかる」といふ動詞と相連合したる他動詞にて、「生ひ立つ」といふは「生ひ」と「立つ」といふ二個の動詞が、連合して出來たる自動詞なり。斯の如き類は合併動詞といふなり。

動詞の活用

動詞は、いろ〳〵其の語尾を變化するものにて、例へば、「學ぶ」といふ語に就きて申さむに、

まなば、まなび、まなぶ、まなべ、

といふやうに「まな」といふことのみは變らずして、其の外は「ば」となり「び」となり「ぶ」となり「べ」となる。其の語の尾が斯く變ずるなり。この變化を、動詞の活用、或は換言すれば動詞のはたらきと申すなりさて、斯の如く變化するのみにあらず。動詞の語尾の變化するさまには、なほいろ〳〵なるあり。いろ〳〵さま〴〵にはあれど、其の變化を爲すさま、大かたは、正しき規則に從へり。規則なきものは、極めて僅かなり。語を換へて申さば、動詞は、其の語尾を變ずるに、規則正しきものと、規則正しからざるものとあるなり。更に語を換へて申さば、動詞のはたらきに、規則正しきものと、不規則なるとあるなり。これによりて、動詞は、又二種に分れ、規則正しく活くものを、規則動詞といひ、或は正格動詞といひ、正しからざるを、不規則動詞或は變格動詞といふなり。

規則動詞の中にも、又、其の活きかたに五種あり。其は、四段活用、上二段活用、下二段活用、上段活用、下一段活用と稱するに五種なり。不規則なる方にも、また、四種ありて、加行變格、左行變格、奈行變格、

良行變格と稱す。これを順序に述べむ。

(二)　四段の活用

四段に活用する詞といふは、其の語尾が四段に變化するにて、例へば、「打つ」と云語の如く、「打た」、「打ち」、「打つ」、「打て」といふやうに、語尾が、た、ち、つ、てと四段に活ける如きものなり。斯の如く、單に、多行のみにはあらず、其の他にもあり。「云ふ」とい語の如きは、

云は、　云ひ、　云ふ、　云へ、

といふやうに「は」「ひ」「ふ」「へ」の四段に活けり。

この四段活用の規則に從うて活く詞は、加行、左行、多行、波行、末行、良行の五行の詞のみにして、(行といふことは、前に五十音の圖を示せる時にいひたり。)

其の一二の例をあぐれば、

行か。	行き。	行く。	行け。
屆か。	屆き。	屆く。	屆け。
咲か。	咲き。	咲く。	咲け。
解か。	解き。	解く。	解け。
開か。	開き。	開く。	開け。
閉さ。	閉し。	閉す。	閉せ。
話さ。	話し。	話す。	話せ。
指さ。	指し。	指す。	指せ。
立た。	立ち。	立つ。	立て。
打た。	打ち。	打つ。	打て。
放た。	放ち。	放つ。	放て。
追は。	追ひ。	追ふ。	追へ。
食は。	食ひ。	食ふ。	食へ。
拾は。	拾ひ。	拾ふ。	拾へ。
富ま。	富み。	富む。	富め。
慰ま。	慰み。	慰む。	慰め。
讀ま。	讀み。	讀む。	讀め。
取ら。	取り。	取る。	取れ。

去ら。　去り。　去る。　去れ。
繰ら。　繰り。　繰る。　繰れ。

などいふ如きものにて、皆「か、き、く、け」「さ、し、す、せ、」「た、ち、つ、て」「は、ひ、ふ、へ」「ま、み、む、め」「ら、り、る、れ、ろ」といふやうに、四段に活くなり其の他にもいと多し。これは、唯思ひあたれるまゝ、一ッ二ッのみ。

（二）　上二段の活用

前に述べたる四段の活用といふは、五段の中の四段まで變化するなれど、此の上二段に活くといふは、五十音の五段の中の上の方なる伊ノ段宇ノ段（段の事は、前に五十音の圖の所に述べたり。）の二段のみに變じて、其の他の活用には、るれを別に添へる如きものなり。例へば、

戀ひ、　戀ふ、　戀ふる●　戀ふれ●

といふ如く、語尾のまさしく變ずるは、單にひ、ふの二段にして、（ひは伊ノ段、ふは宇ノ段の音なり。）其の他の二段は、戀ふの下に、るとれとを添へたる如し。
此の活用に屬する動詞は、五十音の十行の中にて、加行、多行、波行、末行、也行、良行、和行の六行のみにして、その一二の例を思ひあたるまゝにあぐれば、

起き。　起く。　起くる●　起くれ●
落ち。　落つ。　落つる●　落つれ●
强ひ。　强ふ。　强ふる●　强ふれ●
恨み。　恨む。　恨むる●　恨むれ●
老い。　老ゆ。　老ゆる●　老ゆれ●
懲り。　懲る。　懲るゝ●　懲るれ●
率ゐ。　率う。　率うる●　率うれ●

といふ如き類にて、此の類に屬せるは、あまり多からず。殊に口語には、近き頃は、ますゝゝ減ずる如し。これは、昔に上二段にいへる言葉の、多く上一段にいふやうに成り來れる故なりといふ。それは、訛り來れ

るなり。例へば、今の世俗の語に「起きる」「起きれど」などいふ事をいふが、これは、元來は、上にも例に出せる如く、「起くる」「起くれど」といふやうにいはざる**べからざるなり。それが、訛りて、「起きる」といひ「起きれ」といふやうなれるなり。**故に、世俗の語にては「起く」といふ語は、「起き、起く、起くる、起くれ」の如く活用せずして、「おき、おきる、おきれ」といふやうに活用せる如くなれり。さながら上一段の活用に成れるなり。

文林

江上霞　近衛忠熙

芦のはの若葉もいまだもえなくに
かすみそめたり難波江のうら

早春海　毛利元徳

和田津みの沖つ汐かせなほさえて
かすみもうすし浦のまつむら

春夜雨　鍋島直大

さやかにもふる春雨のおときゝて
夢ものどかにむすぶ夜半かな

山路雉　高崎正風

こえはてん山路の末にひとむらの
菜のはな見えてきゞす鳴なり

行路花　津輕承昭

柴ひとにはなはと問へど越てゆく
みねのさくらは盛なりてふ

幽居山吹　前田利嗣

稀にきて見る人もなし世をいとふ
わかかくれかの山ぶきのはな

故郷山吹　竹屋光昭

ふるさとに咲るやまぶき九重に
かざしゝ春のむかしをぞ思ふ

川蛙　　長谷信成

六田がはなびくやなぎの影みえて
ながるゝ水にかはづなくなり

暮春鶯　　宮地嚴夫

梢みなみどりとなりぬうぐひすの
なく音ぞかりは春にのこりて

岡落花　　諏訪忠元

打つとふ人のこゝろにさわがせて
さくらが岡のはなぞちりける

猫　　千葉胤明

とまりゐし小蝶はらひてから猫の
爪にかゝるはすみれなりけり

蛙　　近衛貞子

降あめの近づきにけんかしましく
いけのかはづの聲ぞきこゆる

海邊霞　　蜂須賀隨子

浦風になみのはなちるあさぼらけ
にほひをそへて立かすみかな

行路落花　　前田朗子

あくがるゝ道のゆくてのさくら花
散くるもまたおもしろきかな

春期　　柳原愛子

里の子が花ちるころをきゝながら
あさいするまでなれる春かな

野春風　　小池道子

ちる花もをりをり見えてきゝす鳴
かた野のみのに春かぜぞふく

春月　　北島以登子

淺みどりやなぎの枝にふきわたる
かぜまた寒しはるの夜のつき

花通鶯

七重八重さきかさなれる花の中に
かくれぬものはうぐひすの聲　　保科節子

春澤　　岡崎竹子

長閑にてかせの吹とも見ゑなくに
野澤のみづにさゝなみのたつ

野径蝶　　原田蒼生子

たんぽゝにやどると去ちで野へ行む
我裳すそよりとぶ小てふかな

春雨　　山本富士子

もゑそめし門のやなぎに色そへて
去づかにそゝぐはるの雨かな

雨中柳　　諏訪晴子

去づけくもふる春雨にあをやぎの
みどりの色ぞふかくなりぬる

春月　　安齋御代子

おぼろなるかすみの袖を月かげの
もれてぞにほふ花のしたかげ

足の詞

石見の家　謙介

足よ、汝は吾ために盡くすことこゝに廿とせあまりにて、己れ母の胎内を出でしより、晨に夕に、己れの側をさらず、雨はげしき朝、風荒るゝ暮、土も金も溶くる計りの暑、雪ふりつもり、結ぶ水はたろか、手さへ凍る冬の空も、己れの行かむとすれば、必らずつきそひて、一とせ三百六十にあまる日、一日だに息ふことなきは、いたく己れの感じたる所なり。つら〳〵こしかたを顧みれば、吾がよはひいと若かりしときは、故郷の山河を跋渉して、熊笹の中、いばらのうち、流れはげしき谷川も、汝は常につきそひて、爪をはき、膝などかききさきて、紅のち去ほに染みたることもあり。

あるときは、若き童子といさかひして、己れのあやふきをりしも、汝のために遠くにげさりて、からくも、雨のごとくふりちる石などをさけ得たること、他人の園をふみこえて、柿の實など戯れに盗みとり、去らむとするとき、大聲によびとめられて、あはやと思ふそのときも、汝ははやく木の枝より己れを負ひて飛び下りたる、あるときは競走會に第一の勝利を得たるなど、これみな汝のたまものなり、さても汝はつかれたるさまも見えず、孜々として立ちはたらき怠ることもあらざりき、己れ二八の齡の頃、故ありていと去たしく、すみなれし故郷を後に、東の都にのぼるときも、伴を乞ひて、けふは汝と隅田川に堤の花をながめ、東叡山に森の月を見ることゝはなりぬ。

されど己れは、いまだ汝に對してむくゆることを得ず、はや廿あまり二年になりぬるも、如何にせむ、短袴の境遇、車にものして汝と花を見、月をながむること能はざるは遺憾きはまることゞもなり、汝は嘗て語りけらく、吾は君の從僕なり、されど君を大切に萬のれはせ言に從ひて、事をなすこそ己れの本分なれ、露ほども君の惠みを望むものにはあらず、夜寢るときなどは、君に先だちて衾に入るだに心ぐるしきを、慈愛ふかく、こよなくもてなし給ふ君の御心をは、凡庸の吾等いつも感泣せざる隙もなし、何でか安樂をむさぼり奉らむ、たゞ一日もはやく君の錦繡を着かざりて、古鄕に歸り給はむ折をまつ、他には希ふ所もなしと、この言は如何にれのが心に徹みわたりしぞ、汝の忠に義に、仁義道德、くだちゆく今の世にまれなるものとこそ思ふなれ、げに。去にし廿七年はいとはげしきいたつきにて、汝はたつことをだに得なざず、日を經るまゝに全身はれわたりつるを見て、われも心はれ〳〵しからず、醫師よ藥と看護のすゑ、如何なる神のたすけかや、病は次第に平癒しつ、をりしも、われまたや

まひの床にふしてくるしむを、汝は病後をも厭はず、眄々看護しられたり、おもへば汝の如きものをわれにつけおきてければ、みまかり給ひし父母も、さぞ心安くおぼしめさむ、それにつけても、末の末までおもひはかり給へる兩方の御恩の高さ、謝するにもまた餘りあり、そもわが病勢のつよかりしときは、灸もて汝をくるしめ、鍼術まではほどこしつるにも、汝はわがためにあまむじたり、これをおもへば、われはうれしくて涕もこぼるゝぞかし、恕せよ、足今はこれ大海に漂ふ捨小舟、いつかは波のまに〱、大陸に漕ぎ就く時もあるならむ、汝もまた勉めはげみて扶けよや。

雜報

●御救恤　過日福井縣勝山町及荒土村村、岡村火災の趣、憫然に思召され、天皇皇后兩陛下より、御救恤として金千二百圓下賜せられたり、いとも畏き事ならずや。

●皇后陛下の御歌　山階宮は今年八十一歳の御高壽に渡らせらるゝを以て、小松宮其他より寄松祝と題する和歌を御寄贈在らせられたる由なるが、殿下には右の短冊八十一葉を貼りたる一雙の屏風を作らせられ、其後天覽に供したるやに承はりたるが、その節皇后陛下の御詠に

さかゆく老木の松はわかまつの
千とせのすゑもみるべかりけり

●濱離宮觀櫻の御宴　去る二十三日は御豫定の如く、濱離宮に於て觀櫻會の御宴を開かせらる、今其の御摸樣を洩れ承るに離宮御車寄には、紫縮緬菊御紋の御幕を打廻し、御通路の見惡き場所へは白黑段段の幕を張り、御庭の入口には破風造りの緑門を設け、

茲にも紫縮緬菊御紋の御幕を打廻し、紫揚卷を以て之を絞り、便殿は中島の御茶屋に美麗なる装飾を施して玉座を設け、御飾付の盆栽は、宮城より御取寄せとなり、又松の御茶屋先なる廣場には、松葉を以て造りたる巾五間長三十間の立食場を設け、美事に飾付け、盛り花は府下有名の花屋より御買上になりたる上に、新宿御苑に於て栽培せる、牡丹、蘭、西洋草花の類等最も珍らしきものを集められたり。陸軍々樂隊は、御馬見所脇と便殿脇、及び立食場の三ケ所に於て奏樂をなし、立食場にも玉座を設けらる。御園の櫻花は、八重櫻も早や雨に叩かれて色褪せ、梢頭僅に殘花を餘せるのみなれども、霧島躑躅は早や咲き初めて鳳闕を迎へ奉り、楓樹は今や發芽の色美しく、殊に數日雨後の快晴にて御園の風色一層の趣きを増せり。さて當日は　天皇陛下には御摸樣替にて、行幸御見合はせ仰せ出ださせたるも　皇后陛下には午後二時三十分御出門遊ばせられ、御順路を同離宮に成らせられ、便殿に於て暫時御休憩の後、一同へ拜謁仰付られ立食を賜はりたり。

●皇太子殿下還啓あらせらる　皇太子殿下には御靜養のため、兼て神奈川縣葉山御用邸に御滯在中のところ、御豫定の通り去月廿五日還啓遊ばされたり、殿下には黑川東宮武官長を隨へさせられ、一同に御會釋遊ばされつゝ、靜かに御徒歩にて停車場入口へと向はせ玉ふ、久敷御病氣にあらせられたる御事とて、玉容如何にと御案じ申上げしが、尊顏紅色を湛へさせられていと麗はしく、御体度も殊の外御活潑にて、以前に變らず御健康の御樣子に拜し奉りぬ。

●小菊内侍の御懷胎　常宮周宮の御生母なる小菊内侍（權典侍園祥子の方）には、又々御懷胎にて御産所に移られ、去月廿七日御帶の祝ひありしよし、竹の園生の彌榮に榮え行かせ玉ふぞ目出たし。

●寫眞品評會の献品　大日本寫眞品評會にては、過般同會員諸氏の撮影せし景色寫眞を一帖に纒め、美麗に裝飾を加へたる上、大婚御祝典奉祝の爲　兩陛下へ献上せんとて、豫て調製中なりしが、漸く此程出來上りしを以て、同會總代德川侯爵より宮內省へ納めたるが、今度土方宮內大臣より御沙汰書を下附されたりと云。

●伊藤侯の寄附　伊藤侯嚴父君逝去の際、生花其他供物の寄贈は、一切謝絕せられたれども、尙は平素別段の交誼等よりして、特に寄贈の向も少からず、右に對しては夫々御返禮もあるべき筈なれども、餘事とも違ひ、物品菓子等を以て返禮するも受けらるゝ方に於ても、是ぞと云ふ用にも立ち難き事情を參酌せられ、其方々へは、去る廿六日、三十五日に相當するを以て故人の寫眞一葉づゝを贈り、別に金千五百圓を、日本赤十字社、東京慈惠病院、東京養育院の三ヶ所へ、平分に寄附せられたりと。

●女子受驗者　近年醫術開業試驗を擧行する度每に七八名乃至十二三名の女子受驗者ありしが、本年は前期後期及び實地の受驗者通じて二十七名あり、我邦醫術開業試驗ありて以來、斯くの如き多數の女子受驗者を出せしは、今年が初めてなりと云ふ。

●壬生忠岑の硯、及び桶取の紀念碑　京都洛西壬生寺所藏にかゝる、壬生忠岑の硯は今より百年前、壬生村字かや野と稱する畑中より、同村の農夫が、耕作中發掘せしものなるが、同地は壬生忠岑の御殿跡と稱し硯の緣故もあるにつき、壬生寺の住職北川智海師は、目下忠岑の紀念碑を建設する計畫なりといふ。又同寺狂言中有名なる彼の桶取の地は、目下葛野郡朱雀野村大字壬生村の內にて、字尼池と稱し、一間四方位の小池なるが、或婦人が此池水を汲みて地藏尊に供したる故事を取りて彼狂言となしたるなれど、今桶取の由來を取調べて石碑に彫刻し、以て同池畔に建設せんと、

此また同師より同村長及び同寺の大念佛會役員に協議なし、其賛成を得たれど目下出願の準備中なりとぞ。

●東京府高等女學校　築地にありし東京府高等女學校は本年二月焼失後直に神田今川小路に假校舎を設けたるが、今度神田橋外に本校を建設する事になりたりとなむ。

●三十八花選　理學博士伊藤圭介翁、春の錦を彩れる都下の櫻花の種類を取調べて、左の三十八花を獵り得たりといふ。

一彼岸櫻〇二糸櫻〇三山櫻〇四嵐山〇五帆立櫻〇六熊谷櫻〇七枝垂櫻〇八兒櫻〇九白櫻〇十筆櫻〇十一逆手櫻〇十二殿櫻〇十三緋櫻〇十四法輪寺〇十五薄墨櫻〇十六かど櫻〇十七有明櫻〇十八御所櫻〇十九手まり櫻〇廿大膳櫻〇廿一虎の尾〇廿二鷲の尾〇廿三伊勢櫻〇廿四遲櫻〇廿五一文字〇廿六芝山〇廿七旗櫻〇廿八雪の山〇廿九桐谷〇卅江戸櫻〇卅一楊貴櫻〇卅二普賢象〇卅三糸く〻り〇卅四鹽竈〇卅五提灯櫻〇卅六曉櫻〇卅七淺黄櫻〇卅八犬櫻

●彦根女學校生徒の養蠶　同校にては女徳修錬の材料及び實業補習の一科として、兼て生徒に養蠶法を課せんとするの計畫ありと聞きしが、本年より愈々其端緒を開かんとて、養蠶の爲め校内に特別一教室を設け、數名の志望生徒を限り養蠶に從事せしめ、全校生徒をして傍ら其實況を參觀せしめ、以て勤儉慈仁貯蓄等の諸徳を修養せしめんとの方案を立て、春蠶發生の頃將に着手せんとするに際し、此時恰も一方には彦根町の有志者舊町立彦根女學校々舍の跡を借り受け、滋賀縣共同蠶業傳習所を設立せんとするに會したれど、同校は以前の計畫を中止し、更に志望生徒數名を限り、有志者設立の蠶業傳習所別科生徒として入學傳習せしむることに決し、該傳習時期中は同校教師一名宛交代該所に出張して生徒を監督せられしのみならず、教師

自身も生徒の中間に交り自ら養蠶の手傳をなし、或は傍ら各級生徒を交代時々該傳習所に引率し、其實況を參觀せしめ、翌日學校に於て實見のことに付き其方法を說示する等、熱心以て之を誘導せられしかど、全校生徒一般も養蠶の何物たることを了解するに至れり、又蠶業傳習所にては實業教師を始め、掛員一同は懇篤に生徒を誘導せられしかど、從事者一同は終始愉快に勉勵したりと云ふ、而して該傳習所は本年初めての開設なれど、其結果如何あらんと懸念せし者もありしが、實際は總ての成蹟頗る好結果を顯はせしとのこと、同校に於ても來學年度よりは一層此主義を擴張せんとせらるゝ由、該傳習所よりは此の如き好成蹟なりしを以て過般生徒卒業証書授與式を執行せられたるが、同所幹事は蠶業傳習所設置の來歷を談話し、次に養蠶實業教師は春蠶成蹟に付きての申告書を朗讀し、次に傳習所長は祝詞を述べ、卒業證書及び修業證書を授與し、次で犬上郡長の祝詞、滋賀縣蠶業組合會幹事の祝詞、留守彥根女學校々長の祝詞を兼ねたる挨拶、生徒總代の答辭、來賓數氏の祝詞演說等ありて式を終れりとの報ありたり。

●李春生兒孫の留學　前臺灣保良局總裁李春生の孫三名、并に親族の兒四名、都合七名は、去る三月上旬を以て李に從ひ樺山總督の一行に加り上京し、東京ホテルに滯在中なりしが、李歸臺後は牛込なる鳥居忱氏方へ寄寓して、漢學を始め、普通學を修めしむる筈なるも、第一に日本語に通ぜしめざるべからざるを以て、東京盲啞學校訓導石川倉次氏之が教授の任に當り居れり、又七名の兒は皆既に斷髮し洋服若くは和服を用ゐ居れど、一見邦人に異ならずと云ふ。

●明治女學校の擴張　同校は曩に火災に罹りたるを以て爾來新築中なりしが、來る五月一日の新學期より更に其規模を擴張し、女子教育上に一層盡力する筈な

り。

●東京盲啞學校の有様　同校第八回卒業授與式場に於て同校長小西信八氏の報告せるもの左の如し、揭げて以て讀者の參考となさむ。

今證書を授與せる生徒の數は十三名なれども、學科の數を以てすれど十六名と爲る、即ち盲生尋常科六名、琴一名、鍼治四名、啞生尋常科二名、圖書二名、裁縫一名とす、明治二十年初めて卒業生二名を出してより、通計人員六十四名、即ち盲生三十五名、啞生二十九名なり、此等卒業生の情況を撿するに、盲生中鍼治按摩を業とする者十四名、病院按摩三名、本校助手三名尙は留りて他の敎科を修むる者三名、琴師二名、匠訓盲敎員一名、商業一名、病氣死亡各々四名にして、啞生には木工六名、圖畫裁縫温習五名、家居四名、他の學科を修むる者三名、本校助手三名、書記農業指物裁縫死亡各々一名とす。

現在生徒　百七名にして內盲男三十七名、女六名、啞男三十五名、女二十九名、之を府縣に別ては三府二十七縣と爲り、最も多きは東京の三十名、之に次ぐは新潟の十名、神奈川、茨城各々八名、千葉七名、埼玉、山形各々六名、最も少きは一名づゝ、十六縣なり、內島根、熊本、和歌山、愛媛、大分、福岡、兵庫等より特に入學する者なり、之を寄宿と通學とに別ては、通學四十九名、寄宿五十八名とす、之を失官原因に由りて別ては、盲生四十三名中最も多きは遺傳黴毒所謂胎毒十三名、盲生六十四名中最も多きは生來二十八名に次きて、急性腦膜炎所謂驚風十一名とす、盲生は一歳より二十歳まで失官者あれども、盲生には九歳以上に無し、然れども兩者共に一歳より三歳まで最も多し、幼者保育に任ずる者注意を要する所ならん。

資金　平素眷顧の各位に本校資金の現況を開陳し、尙は將來に向ひて垂念を乞はんとす。

金六萬七千四百二十九圓　資金總高

內

金四萬圓　整理公債證書額面

金二萬三千四百九十圓　日本鐵道株劵面（五百二十二株 內未拂高二千六百十圓）

金三千九百三十九圓　中央金庫宿托現金

以上三項より[illegible]

料雜收入凡四百圓、之に政府支出金九百七十四圓、合計五千四百圓を明治二十九年度の經費とす、之を普通の小學若くは中學に比すれど、生徒の數に對して少々の額と云ふべからず、然れども本校教課は特種の施設を要し、殊に盲啞性情を異にし、從て學科多端に亘り、加ふるに一教員にして多數の生徒を擔任すべからず、今尋常科は同一の教員を以て盲啞を教ふれども、是れ止むを得ざるに出で、盲生に至便の工夫成るも啞生に寸益を與へず、啞生に大益を與ふるも盲生に些利を分たず、早晩之を分擔せざるべからず、歐米教育者其不利を極論し、京都盲啞院既に各生に特別の教員を置く、獨り本校然るを得ざるは遺憾の大なるものなり、前述少からざる經費五千四百圓を現生徒百七名に分配するに、計算の便を取り割當つれど一名五十四圓と爲る、之に寄宿生平均一人自ら費す所毎月凡ろ金四圓五十錢と爲るべし、寄宿生一名の費額公私合計金百八圓決して小額と云ふべからず、其費す所少からずして其收むる所未だ必しも多しと云ふを得ずと雖も、現在資金を以てしては僅に現況を維持するに止り、試驗擴張は望むべからず、責ては現資金六萬七千圓に三萬圓を加へ十萬圓と爲し、年々收益五千圓、之に政府支出金千圓を加へ六千圓とも爲し、分擔以て其績を責めんことを本校の冀望にして生徒の幸なりとす、されど職員生徒一同煩勞を厭はず、節約を重し、反古の端書も妄に放棄せず、盲生點字習用に充つる等注意を怠らず且時々慈善會を催し敢て大方の君子を煩す所以なり、今回も本校創業以來二十年、文部省直轄以來十年と爲り、紀念のため校內縱覽を許すに當り、日本繪畫協會の高義に依り繪合大會を本校內に催し入場券及繪畫賣上の內より寄付の約あり、本校のために謝する所なり。

本校に於て將來に冀望する所之に止らず、卒業生徒のためには問屋と爲りて其製品を引受け、生徒をして製品の賣否に頓著なく、一意に製作に從事せしめ、本校は陳列場を設け容易に公衆に賣捌くを便の開く事、又盲啞と爲りたるがために白痴と爲りたる者、及通例の白痴等を取扱ふ事、亦本校の試んことを希望する所なり。

終に際し卒業生諸子に一言せん、諸子數年の苦學に

由りて卒業するを得られたるは、諸教員の訓誘の功勞固より大なりと雖も、亦諸子數年一日の如く懈怠なく勉勵せられたる結果とすべし、諸子は勿論多年學資を送り成業を祈られたる父兄の滿足果して如何、是より歸國して自立の道に登らるゝ諸子の得意知るべし、然れども此際最も注意と謹愼とを要す、古語に失敗は失意の時に少くして得意の時に多しと、蓋し得意の時は即ち懈怠の生し易きに由るを戒むるなり、諸子は是より視聽自在の常人と職業上競爭する場合定て多からん、從來父母の愛務と教育の懇切とに慣れたる身を以て、一朝競爭場裏に出陣し、苟も、謹愼、忍耐、節儉、正直の武器を缺かは失敗を免れさるへし、世の冷遇を常とし好遇を幸とする覺悟を要するとは、余か毎度繰返す套言にして、諸君も記憶する所ならん、一塲の式言として聽流しにせさるを望む、更に一箴言あり、他なし、恒心即ち四六時中間斷冷熱なく終始一貫する心を保持することと是なり、事の大成は恒心に在り、熱心にあらす、熱心は時に冷却することあり、恒心は萬碍を壓倒す、諸子の之を鑑別して記憶せられんことを希望す。

唖生卒業後情況

卒業科目等＼卒業職業	木工	圖畫裁縫温習	家塾	尋常科	指物	繪畫	本校助手 裁縫	本校助手 圖畫	本校助手 彫刻	本校助手 書記	農業	裁縫	死亡	合計
尋常科	二	一	…	…	一	…	…	…	…	一	一	一	…	七
仝、圖畫	…	一	一	…	…	二	…	一	…	…	…	…	一	六
仝、圖畫、裁縫	…	三	一	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	四
裁縫	…	…	三	一	…	…	…	…	…	…	…	…	…	四
尋常科、圖畫、指物	二	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	三
仝、圖畫、指物、彫刻	一	…	…	…	…	…	…	…	一	…	…	…	…	二
仝、圖畫洋服及和服	…	…	…	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	一
圖畫、裁縫	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一
指物	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一
合計	五	五	五	三	二	二	一	一	一	一	一	一	一	二九

盲生卒業後情況

卒業科目等＼卒業職業	鍼治按	病院按	學…師	鍼治專	尋常修業	本校助手	仝 唱	仝 按	醫學…	訓育數	商	疾	死	合

	尋常科、鍼治、按摩	鍼治、按摩	尋常科	箏	按摩	尋常科、按摩	尋常科、鍼治、按摩、箏	尋常科、箏、バイオリン	箏、按摩	鍼治、按摩	バイオリン	合計
	九	三	…	…	一	…	…	…	…	…	…	一三
	…	三	…	…	…	…	…	…	…	…	…	三
	…	…	…	一	…	…	…	一	…	…	…	二
	…	…	一	…	…	一	…	…	…	…	…	二
	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…	一
	…	…	…	…	…	…	一	…	…	…	…	一
	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一	一
	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一
	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一	…	一
	…	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	一
	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	一
	二	…	…	…	…	一	…	…	一	…	…	四
	…	一	一	一	一	…	…	…	…	…	…	四
	一一	八	三	三	三	二	一	一	一	一	一	三五

生徒現員表（二十九年三月末日調）

	盲 男	盲 女	唖 男	唖 女	合計
通學	一四	二	一八	一五	四九
寄宿（自費・給費）	二三	四	一七	一四	五八

合計
三七
六
三五
二九
一〇七

盲生失官原因表（仝上）

原因＼年齢	生來	一	二	三	四	五	六	七	九	十一	十四
生來	二	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…
遺傳徽毒	…	五	一	一	一	二	二	…	…	一	…
化膿性結膜炎	…	一	一	…	…	…	二	一	…	一	…
外傷	…	…	…	…	…	…	…	一	…	…	一
鞏膜及鞏膜結核	…	…	…	三	…	…	…	…	…	…	…
神經系知覺過敏	…	…	一	…	…	一	一	…	…	…	…
內障炎	…	…	…	一	…	…	…	…	一	…	…
網膜炎	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	…
角膜炎	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…
痘瘡	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	…
近眼	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一
衰弱	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一
不詳	…	一	一	…	…	…	…	一	…	…	一
合計	二	九	四	六	一	三	五	三	一	二	四

	十五	十七	合計
	…	…	二三
	…	…	六
	二	…	四
	…	…	三
	…	…	三
	…	…	二
	…	一	二
	…	…	一
	…	…	一
	…	…	一
	…	…	一
	…	…	四
	二	一	四三

唖生失官源因表（仝上）

年齢＼原因	生來	急性炎腦膜	腦病	外耳炎	咽喉的實利扶亞	神經系知覺過敏	打腦	頭部濕疹	熱勢病	赤痢	百日咳	慢性腫腦水	不詳	合計
生來	二八	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	…	二八
一	…	三	一	二	…	一	一	一	…	…	一	…	…	一〇
二	…	二	二	…	一	…	…	…	一	…	…	…	…	七
三	…	四	…	一	一	…	…	…	…	…	…	一	二	八
四	…	二	一	一	…	一	…	…	…	…	…	…	一	六
五	…	…	…	…	…	…	…	…	…	一	…	…	…	一
八	…	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…	…	一
十八	…	…	…	…	一	…	…	…	…	…	…	…	二	三
合計	二八	一一	五	四	三	二	一	一	一	一	一	一	五	六四

◉慈善演藝大會　平素慈善の志し篤き東久世伯爵夫人、南部伯爵北堂、南部伯爵夫人、大隈伯爵夫人等、の發起なる慈善演藝大會は、帝國濟民會の乞兒救養事業を助くるの目的を以て、近々明治座に於て開會せらるゝ由、出演者は名優市川團十郎、尾上菊五郎を始めとし、其他何れも諸藝の達人のみにして、演藝の番組は、和洋音樂、能狂言、義太夫、常盤津、手踊等其外數十番なりと、其開會の趣意は左の如し。

貧兒授業慈善大會演藝趣意書

貧民の種類及び程度多きか中に別けて乞丐と云へる最下等の階級を作りて人の袂に縋り人の情を仰ぎ衣食するを業とするものは正業の何たるを知らざれば勤勉の心なく浮浪の生涯に終る誠に歎ずべきなり豈之を救濟せずして可ならんや

然り而してこれを救濟するに金穀物品を惠與するは益々怠惰の心を增長して其境遇に安んぜしむるの傾ありて救濟の効なく反て慈善の趣意に悖ること大なり故に彼等を救濟するは職業に就くの道を授け力食力衣の樂みを悟らしむるより切要なるはなし而して襁褓の上より乞丐として成人したるものは之に就業

せしむる容易のことにあらざる如きも元來惡意あり
て然るに非ざれど識らざるものに教ふるは素糸を染
むるが如く易きものあり苟も其方を得れば之を正道
に導く難しとさなず然るに是を自然に放任するとき

は遂に正業に就くの期なく不良の心を起して竊盜掏摸等の社會に入り監獄に入るを入學と唱へ監獄を出つるを卒業と稱し一生を誤る聞くもの誰か乞兒の授業を必要にあらずと云んや

然り乞兒をして正業を授けしむると之を自然に放任するとの別は恰も乳兒の匍匐して井に陷るを見て之を救ふと救はざるとの岐の如し現に東京市内のみにて邪徑に迷ひ滔々相率ひて將に陷井に墮落せんとする乞兒の數五百に餘れりとなん今にして之を救はざれば悉く入門卒業の惡徒に孵化するに至る豈恐るべきに非ずや彼乞兒は人道に於て太だ心を寒ふするに足り慈善の道に於て獨り傍觀すべきにあらざる也

然れば帝國濟民會は授業院を設て定住なく定業なく道路に遊手彷徨する貧民を導き之に職業を授け勤勉の性を養成して好成蹟を得たり今や其歩を進めて愍然なる乞兒をして良心を感化する倫理人道の教育を與へんとす妾等其擧を賛して慈善演藝會を催し其集金を同會に寄贈して乞兒修養の資に供し有害に陷り易き貧兒を化して有用の人たらしめんと欲す大方の仁人義士乞ふ幸に此意を諒し賛助參會あらんことを敬て白す

●奈良縣高等女學校の開校式　奈良縣高等女學校にては、豫記の如く去る廿四日奈良倶樂部に於て開校式を擧行したり、古澤知事、田中書記官、縣立各學校長、同校職員生徒等二百餘名列席、先づ國歌の合唱　勅語の捧讀あり、次に知事の告辭來賓の祝辭演説、校長及教員の祝辭演説、生徒の祝辭等あり、畢りて散會したり、因に記す同校入學の生徒は百四十三名あり、去る二十七日より授業を始めたりと云ふ。

●女工運動　大坂なる金巾製織會社にては、從來業務の餘暇寄宿工女の爲めに、讀書、算術、習字及裁縫等を教授し來りしが、漸次進歩して目下其數三百餘名に達したるより、教員及社員發起となり、頃日櫻島に於て春季運動會を催し、唱歌、遊技等數番ありて、各優等者に賞品を與へたりといふ。

●宇治の茶摘　は毎年五月に至りて着手することなるが、本年は各地方とも紡績事業等の行はるゝに依り、

徒手も茶摘女としてやすき賃錢にて來るものならんとて、宇治の製茶家は一般に心配し居れり、されど新芽にして極上等の分は勿論摘むに至るべきも、收支償はず、結局打捨置くことに至るべしと云ふ。

●伊藤侯母堂の平癒　伊藤侯の母堂には、十藏翁逝去の頃、一時甚だ危篤の模樣なりしが、此程全く平癒されたるを以て、首相邸にて床上げの祝宴を催ふさるゝといふ。

●孝子　大阪府西成郡九條村百九十番屋敷の鍛冶職鈴木民三郎（十八年）は、天性質直にしてその養母てる（六十一年）に事へて能く孝道を盡し、偏く鄉黨の褒められものとなれるが、元來民三郎は生れて百日め位の頃棄兒となれるを、てるに拾ひ上げられたるなり、てるは貧しき中より實の子の如くに愛み、百方と貰乳などして手鹽にかけて育てたれど、民三郎は爭でか其恩の忘らるべき、七八歳の頃より夙くもわが身の上を聞知り、尋常の小兒に異りて萬に心を用ひ、養母の歡心を失はず、養母もまた所生の兒にもまして之を可愛がり、尋常小學校に入學させて卒業せしめ、更に高等小學にも就學させたきは山々なれど、如何せん老母一人の手許にては學資に事缺きて、その意を遂げず、遺憾ながらも鍛冶職に就かしめたり、民三郎は養母の側に侍し得ざる事の心ならず、常に案じて五日め、又は一週間毎に葉書にて養母の安否を問ひ、毎月一二回は必ず歸り來り、養母の健やかなるを見ては喜悦の色滿面に溢れ、一生の樂みは之にますものなしといひをれり、斯く神戸に出稼するは孝養を盡しがたきのみならず、往復の旅費など不經濟なれど、寧ろ些少の給料なりとも當地に歸り、養母の側にありて業務に勉强せんと決心し、去月上旬始めて歸坂し、安治川邊のさる工場に通勤することを得、毎日業務終れば直ちに歸宅し、折々は養母の好む物を買ひ來り對坐して食ふを樂めり、

又松島へ行かうなど友に誘はるゝことあれど、殺よく斷りて一錢も徒に費さずといふ、この養母あれどこそこの養子もあるなれ、兩ながら感嘆の至りなり。

●奇特なる少女　大坂府西成郡難波村に住める黒田某の長女よね子（十一年）といふは、天性慈善の心深く、五六歳の時より常に母の與ふる三厘五厘の小遣錢も徒に費しゝ事なく、之を貯へれき路の邊に立つ乞食門前に憐みを乞ふ者などあれど、これに施すを此上なき樂みとなし居れり、一昨年征淸の事起りて恤兵部を設けられしや、よね子は兩親に知らせず、己が貯蓄の内より金一圓を獻じ、其受領證の到來するに及びて、兩親はじめて之を知りて打驚きたり、又新川に架橋の企てあれど直ちに工費の内へ應分の寄附をなし、軍人吊祭又は慰勞の擧あれど是にも同じく若干の寄附をなしゝなど、其他にも慈善の行ひ枚擧に遑あらず、昨年五月の頃、よね子は圖らずも大坂の慈善新報を見て大に喜び、自ら購讀なしゐたるが、ある時父の許しに瓜生會の趣旨を聞き、甚く感嘆し、遂に父に謀りて同新報を毎刊自費にて送致せんことを同會に照會し、今日に至るまで怠らず、同會に於ても其篤志を嘉し、十分少女の行狀に調査を遂げしに、洵に世の龜鑑となすに足れりとて、此程同會より畏くも皇后宮陛下の御思食になれる綿織絲紀念織、並に御紋附錫製の盃を難波村役場を經て贈與せられたり、よね子は現に難波第一尋常高等小學校に通學し、高等科第一學年に在りて勉勵せりといふ、誠に感心な少女といふべし。

●西ケ原の養蠶　王子西ケ原蠶業講習所は、例年の如く各敎師分担を定め、傳習育試驗育を始めたり、蠶兒は昨年に比し一日早く、去月廿六日より掃立てに着手し、翌廿七日午前十一時前後九分通り掃立てとなり、其桑は過日の非常なる暖氣に俄に發芽を促したれど、其後忽ち冷氣となりし爲め伸張を止め爲めに昨年よりは

五六日の晩れを見るに至れり、試驗科目は蠶種密藏、蠶蛾交尾時間、産卵早中晩、桑葉滋養試驗、萎縮病桑質、ラミー給與、蠶種加害、掃立、夏蠶原種飼育四化蠶飼育、同功繭、虚弱性遺傳、軟化病、蠶の種類、微粒子の遺傳々染繁殖等にして、本多、辻、松永、河原、石渡の五氏之れを分担し居れり、目下本科生は六十五名、傍聽生三十三名あり、同所より各地方へ養蠶教師として紹介したる同所卒業生は四十七名にして、廣島縣十二名、三重縣七名、山形縣五名、靜岡、青森各三名、東京、福岡、和歌山各三名、新潟、福井、岐阜、鹿兒島、京都、山口、滋賀へ各一名なり。

●東京感化院の擴張　東京なる南豐島の御料地内に設置ある同院の事業は、不良の少年輩を感化して善良なる國民となすが爲めに設けしものにして、去る明治十八年仝院創立以來年々許多の不良者を矯正し、一は犯罪を未然に豫防し、一は敎育家の及ばざる處を補ひ、或は家庭敎育の爲めに便益を與へ、或は農工業者を養成して興業の道を得せしめ、且犯罪人類學上に於ける研究の好材料にして、已に今日に至るまで、仝院が感化の効を奏し實績の顯著なる、實に社會に利益を與ふる淺少にあらざるなり、今回仝院に於ては益々其規摸を擴張し、全國府縣に各一ヶ所の入院生依賴者申込所を設け、各感化生入院依賴者の便宜を圖るときく。

●同聲會　春季大音樂會　音樂學校卒業生諸氏の組織に係る同聲會にては、先月十八日午後二時半より上野公園音樂學校内に於て春季大音樂會を擧行したるが、當日は先頃歐州より歸朝したる幸田延子孃が歸朝後始めて得意のバイオリン及唱歌を演奏し、其他の專門諸名家の出席もあり、近頃稀なる盛會なりしと云ふ。

●漆工會の最優等品　上野の同會出品中最も精巧を極めたるは、隅田川蒔繪、和歌浦蒔繪、加茂川蒔繪等の文臺硯箱等なるが、就中隅田川の歌繪蒔繪は植松包

民氏の作にて、家隆卿の歌

月影のさすやいは崎すみたかは
　こゑてまつちのやまのかげより

と云ふ文字を青貝を以て嵌入せるものにて、意匠最も斬新、其價は八百圓なりと。

●日本生絲の欠點　として在米國紐育横濱生絲合名會社支店員アール、ヴイ、ブリースン氏の列擧する所、左の如し、參考の爲め茲に揭ぐ

第一　織上げたる後光澤の惡しき事

第二　デニールの不同なる事

第三　伊太利絲に比し製造時間中機織の速力に能く耐ふる力に乏しき事

第四　伊太利絲に比して同等の伸力及び張力に乏しき事

第五　細ムラ多き事

第六　二本揚り三本揚り或は四本揚り多き事

第七　質類及び縺れの多き事

第八　ビリ類の多き事

第九　繰返の不良なる事

第十　織上げたる後日本絲は伊太利絲、支那蒸汽機械絲に比し手觸り宜しからざる事

第十一　日本絲は終始同一の品位として使用する能はざる事

第十二　纖維の分裂する事

右の欠點を生ずる原因

第一　原繭の粗雜にして一定せざる事

第二　小資本の製絲家多く大仕掛けの製絲場極めて少なき事

第三　取引方法の不完全なる事

●尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校檢定試驗問題は、左の如し。

國語科（解釋）

歌よむと思へる人のやがて歌にまつはれ、をかしきふることをもはじめよりとりこみつゝ、すさましきをり〳〵よみかけたるこそものしきことなれ、かへしせねばなさけなし、えせざらん人ははしたなからん、さるべきせちゑなど五月のせちにいそぎまゐるあした、なにのあやめも思ひしづめられぬ、にえならぬねをひきかけ、九日の宴にまづかたき詩の心をおもひめぐらし、いとまなきをりに、菊の露をかこちよせなどやうのつきなきいとなみにあはせ、さならでも、おのづからげに後におもへばをかしくもあはれにもあべかりけることの、そのをりに、つきなくめにもとまらぬなどをおしはからずよみいでたる、なか〳〵心おくれてみゆ、よろづのことになどかはさてもとおぼゆるをりから、とき〴〵、思ひわかぬばかりの心にてはよしばみなさけだゝざらんなんめやすかるべき。

第二

爰に爲朝敵の勢ごしにみれば大將義朝大の男の大きなる馬には乘つたり人にすぐれて軍の下知せんとて突立ち上りたる内兜誠にいよげに見えければ願ふところの幸得たりと悦んで件の大矢をうち番ひ只一矢に射落さんと打上げけるが待てしばし弓矢取る身の謀汝は内の御方へまゐれ我は院方へ參らん汝負けば憑め助けん我まけば汝を憑まんなど約束して父子立別れてかれはすらんと思案して番ひたる矢をさしはづす遠慮の程こそ神妙なれ

第三

（イ）祁布與利波、可敝里見奈久豆、意富伎美乃之許乃美多豆等伊涅多都和例波

（ロ）そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに

第四

（イ）小松の御門ことにふれてきやうさくにおはします

（ロ）御ぞなどもたゝけしのかにしみかへりたりあやしさに御ゆするまゐり御ぞきかへなどし給ふ

（ハ）さては一家の郎等ござんなれ汝を射るにあらず大將を射るなり

（ニ）廉恥を忘れ金銀を好み候などは沙汰の限に候

以上

全科 （設問）

第一

文法、母音、子音、促音、拗音の定義を與へよ

第二　に、へ、と、の、が、も、を、のあらゆる用法を示せ

第三　枕詞の性質を説き併せて之に關する參考書を列擧せよ

第四　語學の發達を略敍せよ

第五　左の書は如何なる事柄を記せるものぞ

歷朝詔詞解　金槐和歌集　扶桑拾葉集

藩翰譜　和漢朗詠集

第六　左の人々の文學上の事蹟を問ふ

源隆國　一條兼良　北村季吟

貝原益軒　瀧澤馬琴

第七　長歌、短歌、旋頭歌、今樣歌の形式を問ふ

第八　書牘文体は如何にして發達せしか

以上

作文　（女子の分）

第一　女子の本分

第二　圖書館の必要

右の中いづれにても、一題を、雅文にて、一題を、普通文にて作ること、

●長壽者の來歷　東京府下居住長壽者の中、本年百九歳に達せし清水とわと、百歳に達せし鈴木りんの略歷を掲ぐれど、左の如し

南足立郡江北村大字沼田三百六十三番地
平民清水喜太郎曾祖母

と　わ

生年月　天明八年三月十八日（百九歳）○職業　父母及配偶者はとわ結婚前後とも皆農業を營むとわは八十四歳にして農業を爲すこと能はざるに至れり○住居　南足立郡江北村元鹿濱新田に生る父惣右衛門の長女なり十八九歳の頃元沼田村に嫁し六十五歳の頃元小臺村に移る八十歳にして現今の住居を占む此間二三年每に轉住すること三回に及びしも中年最も永く住居せし地は卑濕甚しく晩年の住地は地盤高くして稍々乾燥に近し○配偶　夫の年齡はとわと同年にして九十六歳にて死去せり其配偶せしは夫妻十八九年の頃なり子女五人あり長子八十一歳より季子六十一歳共に健全生存せり○身躰　稟賦强健幼年より無病其大患に罹りしは八十五歳の時傷寒を病みて殆

ど危かりしことありしのみ其快復後は健全復た前日に異ならず、耳は老後の聽力は甚だ鈍くして聾に近し。視力は百五歳まで眼鏡を用ひずして裁縫を爲せしも現今は視管衰弱のため之を爲す能はず。歯牙は上下皆脱落せり腰は未だ屈せざるに由り杖に倚らず時に王子附近を散歩することあり現今猶ほ二里の路程を歩行するも苦を覺えざるが如し○攝生及素行　平素攝生に意なし數々過食して胃を傷ふことあり晩年は飲食を好む品行は生活の度に比して正しきが如し○生活及貧富の度　生家に在りては衣食に不自由なりしも嫁して後凡ろ四十年間貧困を極めり老後漸く回復し現今は地租六圓餘を納む○衣服　常に汚態を厭ひて能く洗濯するの癖あり○飲食　日常食料は終始米食、魚類野菜等を食するは寡く中年は多食、晩年は少食にして普通の食類に嫌悪なし其最も好みて食するは麵類なり酒、煙草類は曾て之を好まず飲用水は中年居住せし地に在りては俗に堀井戸と稱する井水の汚濁不良なるものを飲用せしが現今は稍々可なるものを用ふ○血族　父母の年齢は共に九十歳を保ち病死せり、とわ出産當時の年齢は二十五歳位なりと云ふ兄弟姉妹八人あり皆五六十歳にて死せり

南多摩郡由木村堀之内六百十八番地
平民尼　鈴木りん

生年月日及生産地　寛政九年七月五日新潟縣越後國東頸城郡大平村に生る（百歳）○職業及配偶年齢十歳に至るまで自家にあり十一歳の時初て江戸駒込縦容軒に入り佛道を修業す同所に居ること五十四年間六十五歳の時去りて東京府南多摩郡由木村堀之内に移住し以て現今に至る未だ曾て婚嫁せしことなし○身躰　稟賦強健眼力は稍々衰弱せるも眼鏡を用ふれど絲線を扱ふことを得、腰は屈することなく杖に倚れど半里を歩行するに堪ふ壯時二回感冒、痲疹に罹

り醫師の診療を受け凡ろ半月にして全癒せり○性行沐浴は現今老衰のため三四日に一回之を行ふ教育は普通にして佛道を信奉し資性篤實なり○衣服　常に清潔質素を旨とす○飲食　常食は多量なるも嗜好品は茶及菓子なり○住居　土地平坦にして空氣の流通宜し○血族　父は七十八歳母は七十六歳兄は七十五歳の高齢を保ちて死せり

●前田正名氏の唱歌　去十七日京都に開きたる全國五二會懇親會の席上にて歌ひたる唱歌は左の如し

○五二會(新調)　作歌　三木　茂子

立　歌

「後の世の春をたのみて植たきし、五ッ二ッの木々の苗、三ッのとしつき重ね來て、今日九重に咲き匂ふげにや御國ともろともに、幾千代かけてさかゆなん〱

○國の重荷(同上)

吾ものと思へばかるし笠の雪　國の重荷をかたにかけ、夏の日中も冬の夜も、寒さ暑さのいとひなく、たとへこの身はたふるとも實業起してやるわいな

○　前田正名氏作

六十餘洲の此民が、道を守りて一筋に、心一ッをたよりして、けふ九重の大社、神にちかふて鴨川に、乘出す船の乘込は、大極殿の前揃ひ、心盡しの大和夫が、錦の旗をさゝげ立、錦の旗をかゝやかせ

●黴毒の傳染　黴菌毒の恐るべきは、今更喋々するまでもなくみな能く人の知る處なるが、接吻によりて此毒の傳染するもの最も多く、又烟管、笛、湯呑、及衣服等によりて傳染し、憐むべき不幸に陷ること甚だ多しと云ふ、西洋の或る玩具店の主人は元來黴毒症に罹り居りしが、兒童の其店に來りて喇叭を求むるに當り、毎に自から之を吹き試めし、此品良し彼品優れりとて賣りし爲め、此店より喇叭を買求めし百餘人の小

見は、悉く黴毒に罹りたりと、我國にても緣日などに於て能く見る處なれど、世の婦人たちは最も注意あるべきことなり。

●米澤の機織業　米澤紬の本場なる山形縣米澤地方の織物業者數は、左の如し

織　戸　二百八十四戸
機臺數　三千四百臺
職　工　男三百四十八　女三千零六人

●配偶有無者　現在の全國人口を配偶の有無により區別すれど、左の如しと云ふ

有配偶　一千五百三十六萬一千四百五十八人
男女同數
無配偶　二千六百四十四萬八千七百四十四人
男一千三百四十四萬六百六十九人
女一千三百萬八千七十五人

●鷄卵貯藏法　先づ鷄卵を充分に洗ひ、暫時食鹽を混ぜたる水中に投れ置き、更に過滿俺酸加里水の中に入れたる後泥炭を盛りたる目の粗き籠に納れ、乾燥にして空氣の流通よき場所に貯ふべし、此法を試驗せし人の言に依れど、秋貯藏して冬季中に食盡したる百箇の内異狀ありしは僅か三箇にして、其他は風味佳良少しも新らしきものに變らざりしが、右三箇は既に初めより異狀ありしものならんと云ふ、之れ鷄卵の腐敗するは外殼、內皮を貫穿き侵入する所の黴菌の作用なるが、泥炭屑は此黴菌の繁殖を防ぐの効あるが故なり、尤も充分に鷄卵を洗はざるときは、泥炭屑は既に附着せる黴菌も撲滅すること能はず、又水一升に過滿俺酸加里少許(ナイフの尖頭に掬ひ取りたる程にてよし)を投入し、其充分に溶解して水液の鮮紅色を呈する迄混和したる後、新鮮なる鷄卵を之に投じ、全く水液中に投入せしめ、一時間の後之を出取して其充分に乾燥するを待て、白紙に包み籠若くは箱の内に入れ、乾燥して餘り空氣の烈しからざる場所に貯ふ、尤とも鷄卵よ

豫かじめ鄭寧に洗滌するを要す、汚物の附着する箇所よりは輙く腐敗するものなればなり、斯くして貯藏する鷄卵は七ヶ月以上變味の患なし、藥品も單純にして

且つ廉なるが上に、少しも鷄卵の風味を害せざるが故、

何人も之を試むること難からざるべし。

●和歌麓の栞　は、岡吉胤氏の新著にして、その編纂の趣意は、かの麓の塵、ふるの山ぶみなどの躰裁を折衷し、専ら初學の者の和歌を學ぶに便よからしめんとてあつめられたるなり。その端書にいはく、

ふもとの塵ひぢよりなれるてふ山のたくにふるの山踏ふみいらむうひまなびの道の栞となるべき歌典どもは濱の眞砂の數多かるもあるは事そけあるは事去けくて、初學の輩にはたつきよからぬのみならず、大陽暦と改まりきつるあらた世のさまにかなはずいはゞ新年に春をよみこめ、二月に花を詠じあるは六月に晩夏の意をのべ、九月に菊のさかりをよめるなどの類、いとまどはしき事はた少からざれど、こたび數子等の乞へるもさることにおぼゆるものから有賀翁の麓の塵によりて、ことのはをならび曙屋のあ

るじが古の山踏にならひて題意をあらはし、四季は

氣候によれるも前に新年部をかゝげ、戀部、釋教などのわづらはしきまで多かるをはぶき今の世に行はれざるも、又日、應狩などのみやびわざは古きに從ひ唐國のはかなき傳へに出でたる上巳、七夕などの題をのぞき、末に新題をかゝげて、かの天雲のたなびく山の高ねにこゝろざゝむ人等の道まどはざらむ麓の志をりにもとかくは物しつるになむ。

と、この書のいかにあらんかは、このはしがきにて知らるべし。（價廿三錢…賣捌所…吉川半七）

●おことわり　此度は印刷之都合にて（四月廿日／五月五日）二回分之兼題をまとめて揭けぬ。

三輪田女史の女子教育一斑は原稿の都合によりて此の號に（十七）をのせたり（十六）は次號にかゝぐる事となりぬ、讀者その心して見たまひね。

教の庭

四月廿日　兼題　惜花　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　埼玉縣大里郡佐谷田村　大竹治子

ひもとける文はさしれきて窓にちる
　花のかすのみよまれけるかな

地　東京下谷仲徒歩町　住山幾子

もろ人のをしむこゝろをよろにして
　ちりゆく花のゝらめしきかな

人　三田四國町二十二番地　師岡千代子

たくひなきにはひならすはさくら花
　なかなか風もさろはさらまし

こゝろなき木末のかせそうらめしき
　ちらしてすくるはなのしたみち　佐々有鄰子

のさかなる風なきうらにちるはなは
　なしむこゝろもまらすやあるらん　高井忎子

さけはちる花のならひさしりなから
　けふさなりてはなしまるゝかな　靜間みつ子

かきりあるものさは兼て志りなから
　ちるなさくらのなにいそぐらむ　住山せの子

身にかへて惜むこゝろなあやなくに
　香さへさまらぬやまさくらかな　大谷友子

ちるなみてなしむこゝろは淵ましぬ
　きのふははなのさかりなりしな　田代艶子

おほかたの人もあかぬにさくらはな
　なにさてかせにまかせやはする　名取正代子

なしめさもかひなく花のちるみれは
　ひさのうへさへなけかるゝかな　永井さい子

ちられさもかれてそ惜しき山さくら
　いまなさかりのはなのいろなは　平澤ふさ子

咲きしより一日もかれすなかむれさ
　なほなしまるゝやまさくらかな　原三楷子

さきしより移ろふものさしりなから
　なほなしまるゝやまさくらかな　山根久子

まそてもておほひし花のいかなれは
　けさはあらしにさそはれにけん　三笠嘉子

咲きしより見あかぬものな山さくら
　さかりなからにちるそわひしき　上條よし子

庭さくらちりてかひなくおもひしに
　やまへのはなもいまそちるなる　増田すゑ子

見渡しのなのへのはなのさかりにて　原いち子

にはのさくらはうつろひにけり

春さめにさかりのさくらこきたれて
また見もあかぬはなのなしさよ　松尾こさ子

惜めともさくらはちりぬお庭井かは
せめていせ木のなみさたに見ん　静もゝ代子

時過ぎてちるたに惜しきさくらはな
さかりをあめにまかせつるかな　佐々木千鶴江子

こん年はあふやあはすやおいか身は
わけてもはなのをしまるゝかな　萩原しける子

明けはまたくるゝもをしと思ふまて
ひと日もはなをわすれさりけり　星野かづ子

待たなくに春のなかはも過ぎにけり
ちりたつはなのをしきのみかは　星野仁子

手折るさへいとひし山のさくらはな
ちるを惜しまぬひとなかりけり　小野田のふ子

青やきのいとしつかなるはるかせも
はなのさかりはいとはれにけり　佐藤ゑん子

はるさめのふりしきるよは花の上に
こゝろおかれてねられさりけり　福本利家子

あめ風のなからましかはさくらはな
夢ちることはしらすやあるらん　碓井信子

さくら花さくまほとなくちる見れは
さかすやはとそおもはるゝかな　碓井武子

あたといひし櫻のはなもけにけふは
をしくもあたに散りにけるかな　碓井和可子

誰も皆惜しさくちるかけのはなゆゑに
ながきはる日もこゝろせくらん　湯澤曾子

こんはるもさくらん物とさくらはな
おもひすてても惜しきけふかな　畠山千代子

ひさゝせにふたゝひ咲かぬ花なれは
あたらいろかそなほをしまるゝ　山本のぶ子

こゝろなく風にさそはれちるはなは
惜むこゝろをしらすやあるらむ　山本常子

をしと思ふこゝろもしらてふく風に
したかふはなのうらめしきかな　今藤なか子

あたなりとおもふものから今さらに
ちりゆくはなの惜くもあるかな　小野寺竹子

あかす見し野山あそひもはるくれて
はなのなこりのをしくもある哉　小町谷りね子

吹く風にはなやちるらんよろつ代の
かめにさしてもをしむころかな　小町谷園子

吹き荒ふよはのあらしにちりうせし
やまとさくらの香ぞをしまる　丸山さよ子

おほ力のをしむこゝろにはるかせも
はなのこすゑをよきてふかなん　太田貞子

さしもしにをしみしかともさくら花
このはるはかりかなしきはなし　武田榮子

ちる花のもとのこすゑにかへりなは
ゆきとふりてもわれはをしまし　山本すみゑ子

やかてちる花とはしれといまさらに　瀬戸榮子

あめもうらめしかせもうらめし

志き島のやまとこゝろのやまさくら
をしくもちれりよひのあらしに　海島信子

つれ〳〵の友となしたるやへさくら
なにをうしさてちりやはつらん　海島定子

なにけなくちりゆく花そうらめしき
をしむこゝろをなれはしらすや　海島廣子

吹くかせにあはれさかりの色あせて
はかなくはなのちるそわひしき　大溪貞子

さしこさに散るをならひの花なるに
いまさらのことをしまるゝかな　大溪繁子

なこりなく散るともはなのよしの山
なほたちまかへみれのしらくも　小幡千代子

あかぬまにちりぬるはなそ惜まるゝ
たもとにとめてはらひかれつゝ　小幡富美代子

いましはしちらすも哉とおもひつる
はなをわりなくかせそふなり　山田ゐい子

ふく風のまに〳〵ちりてをしと思ふ
こゝろをはなはしらぬなりけり　前澤幸子

きのふけふさきみたれたるさくら花
またあかぬまにちりにけるかな　粟田口信子

花咲けとひこぬともゝあるものを
こゝろしてふけにはのはるかせ　岡田紅葉子

のさかなる春をしらてやはなさくら
ちりゆくこさのを志きころかな　荻原章子

咲きそめてまた日もあさきさくら花
つれなきかせにちるそくやしき　大谷津琴子

ふく風にはなのこゝろもいそかれて
今日をかきりとちるさくらかな　大森すみ子

あめもふり風もふくなとはなゆゑに
たゝをしまるゝにはさくらかな　秋園露子

あら志山かすみのはなをぬきすてゝ
けふをなこりとはなやちるらん　秋園喜久子

人もこぬみやまのはなはちりにけり
よをのかれにし甲斐もあら志に　高橋花子

をしみつるはなも映るふはるさめは
なへてふりゆくよのならひかも　高橋信子

手折らんさ立ちよるそてにちる花は
くれゆくはるの名こりなるらん　島田波子

いつ迄もかゝれておもふそての上に
かつちるはなの惜くもあるかな　西村さら子

みにかへてをしく思ふはしらかはの
せきのさくらのちれるころかな　濱口惠喜子

年こさにかれておもひしにはさくら
うつろふ今日のをしくもある哉　大島愛子

昨日まてさもさめてにしにはさくら
ちりゆくけふのを志くもある哉　白井玉子

春さめもかせもこよひはこゝろせよ
はなををしまぬひとしなければ　荒井奈美子

[illegible]

今日はあたにもちりてけるかな　神田志つ子

すみた川はなのさかりも今朝見れは
ちりてはかなきはるのくれかな　町田静子

惜みけるこゝろも知らてにはさくら
くれゆくはるにさもなはれけり　岡田鈔子

ちり亂るはなのゆくへにはるもまた
さもなはれつゝくるゝ今日かな　水島艮子

こゝろなくふるはる雨をうらみにて
かせにちりゆくはなをしそ思ふ　松原常子

うちつれてみ吉野さくらみにゆけは
をしきやかけもあらはこそあれ　根岸英子

たつねきてみれはあらしの山さくら
ふるはるさめにみたれけるかな　遠藤千勢子

みる人のをしむこゝろもしらゆきそ
ちるやすみたのはなのにしきを　松井桂子

すみた川けふをさかりのさくらはな
かせふかぬまにゆきてなかめん　近藤錦子

年のうちにふたゝひ花のさくならは
名こりををしくおもはさらまし　越山ゆき子

ちるはなの名こりををしむこの朝け
ふくはるかせもうらみなりけれ　荒井清子

何處にもくもさ愛てにしさくらはな
はやくも風にみたれそめけり　長島あや子

さくまてはまつにまたれ志庭さくら
今朝ふくかせにちるそわひしき

七重八重みたれそめたるはなのかを
そてにうつ志てちりにけるかな　芝田秀子

ふく風に日かすへぬれはにはさくら
をしさおもへさはやちりにけり　細井糸子

いかにせんみやまおろしにちる花は
さこよりかへるさもまたれは　山田文子

咲きぬれはちるはならひの花になさ
をしむこゝろのはてなかるらん　植木鋼子

あかなくにはやうつりゆくさくら花
をしまぬひさはあらしさそ思ふ　後藤信子

花さけはまた散るものさ知りなから
なほいまさらに惜しまるゝかな　御代ちう子

あたなりさかれて知れさも今さらに
ちりゆくはなのをしくも有る哉　藤井ます子

あめにうらみ風になけきてちる花を
をしむほかなきわかこゝろかな　清水あい子

咲く花にいさふあらしもふかなくに
おのつからちるさまのあはれさ　矢野高子

ちらすしてしはしはさまれさくら花
さそふあらしのよしあらくさも　久門利惠子

はるこさにさくものなからさくら花
をるひさつらしこゝろなくして　野中あさ子

手やそへむ袖やおほはむまさかりの
さくらのねたそあらしふくなり　久松勢伊子

志つかなる風もあらしのこゝちして　重松たか子

はなのちる夜はねられさりけり

さすかにも花の名こりそをしまるゝ
ちるてふことはかねてしれとも
大久津　みち子

をしみてもちりゆく花としりなから
あかぬにほひにまよひぬるかな
德永萬壽子

夜もすからねられさりけりあかぬまに
はなのさかりのすきんと思へば
眞鍋直子

ちるものとかねてしれともさくら花
あかぬあまりにをしまるゝかな
田津木久子

よの常とおもひしれともいまさらに
ちりゆくはなのをしくもある哉
安田ひさ子

ちりやすき花とおもへはいまさらに
みかへりつゝもをしまるゝかな
北村貞子

まち〳〵しかひもあらしの山さくら
またあかなくにちりそめにけり
小森さた子

まちしまにさかりとなれはさくら花
さそやあらしにちるそうたてき
北村孝子

今ははなはちりなむものとしりなから
なほうらめしきけさのはるさめ
卜藏義江子

あかぬまにはやも散りゆくさくら花
仇なるかせは吹かすもあらなむ
卜藏時代子

ちりぬへき日頃なりとはしりなから
はなのさかりそなほをしまるゝ
石原くにの子

ひとみなの惜むこゝろをよそにして
かせのまに〳〵ちるさくらかな
林久子

をしみてもとまらぬ花はなか〳〵に
また見ぬほとそのこけかりける
廣田とめ子

こゝろから移ろふものとしりつゝも
ちひてこひしきはなのかけかな
穗積總子

ちりゆくを惜むあまりにうたゝねの
ゆめにもあそふはなの木のした
石川ろぬ子

咲けはちるものとは兼て知りなから
なほをしまるゝはなのいろかな
石川きん子

ちりかゝる花のなごりのをしまれて
かたりものころわかたもとかな
出田香川子

時くれは散りゆくものとしりなから
はなをなしめはかせもうらめし
澤田春子

さくをまつ日數はなかしさくらはな
またあかぬまにちるそをしかる
井澤すみ子

雨をくらみかせをいとひて山さくら
はなのさかりはしつこゝろなき
横田須磨子

咲けはちる世のならひにもさくら花
ならはてなかくさくよしもかな
靑木春子

一とせにふたゝひさかぬさくらはな
かせのまに〳〵ちらまくもをし
仁井田とみ子

水のうへにちりてなかるゝさくら花
なみのゆくへのはてそこひしき
水津すけ子

雨かせをはなにいとひてをしむ身は
くるふ胡てふもちるかとそ見る
羽田三緒子

咲けはまたちるを惜みてまちしより
河田いし子

はるこゝにさくなる花とおもへとも
はなにこゝろのやすむまぞなき　土井もと子

いつしかと散りゆく花のしたはしな
さくと見しまにちるぞくやしき　池上政子

はかなくも花のすがたはうせはてゝ
またこむはるにあふとおもへと　筧清子

をしきともはかなく花はいろあせて
をしむこゝろぞにはにつもれる　淺賀儉子

もの皆はかぎりある世も我もしれど
あらしとゝもにちりてけるかな　北島切子

今さらにはなになごりのをしきかな
はなにはゆるせかぎりありとも　北島まつ子

けふへなば　あすはちりなむさくら花
つれなきかぜのふきやそめんと　西尾直子

あすかやまつむじの風につゝまれて
このしたかげにひとよねなまし　萩原章子

ちりゆくはなのをしくもある哉

四月廿日　兼題　山吹

（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　芝區三田四國町二十二番地　師岡千代子

春霞ふかくたちこめて、桃櫻海棠など競ひかはに、紅深き天地の中に、ひとり其の色も香もこと木に似ず、七重に八重に枝も撓むまで咲き匂ひて、朝露夕つゆに、風のまにまに打ち靡くさまの、愛たきは、棣棠の花になんありける。妹に似るとめて、春は何日とうたひ、黄金の色に花咲くともてはやすも、みなこの花なりけり。この花、古くは山根とかきたり。其の枝、いと細く、撓やかにて、風に隨ひて打ち搖けは、山ふきといふとぞ。其はともあれ、春の花は、梅をはじめて、萬のもの、みな白紅の色に咲き匂ひぬれは、何れをいつれと優劣もえ分れさるを、この花よ、惜しとうらむる春の末に、ぬけいてたる色香に咲きいてゝ、或は井手のしからみ心にかゝり、吉野の川浪遠く思ひやらるゝも、この花のめてたきになんありける。唯一つ實ならぬと云ふこそ口惜きことなれど、野山に自から生ひいつる山吹には、實をむすぶ物ありとぞ。かの太田の某にこたへし六浦の少女の「みの一つたになきぞ悲しき」の古歌もて、必ず實ならぬものゝ證とするはあたらず。こは後拾遺集兼明親王の御歌にて、御園の花を見てよみ給ひしものなれはなりなど、ひとり打案するほど、後より、これ見給へ、はや咲出はへりぬと云ふに、顧れは、幼き妹の、山吹の初花を、庭より折り來りつるか、口なしの色なるに、我なから、よしなし言の、いとはつかしうてなむ。

地

（山梨縣甲府市山田町）名取正代子

梅櫻とたゝへられしも、今は大方ちりはてゝ、春もいつしかなれゆくなる水きはには、今しも山吹の花の、八重に一重にこきませて、いとうるはしう咲きいてたり。あはれ、此花の朝には露にきほひ、夕には月をやどせるさま、いともをかしく、けに妹にゝるといひけんもことわりなり。かく其姿のうるはしく、其匂ひのえならぬをもほこらんけしきもなく、何とていはぬいろなるは、又やさしともゆかしともいはん方なしや。しかはあれとも、實の一つたになきはいかゝあらん、おのつからとはいひなから、姿のみいかにうるはしかれはとて、心の實なきはとは、人もかくあらんには、いかに口惜しからまし、なとおはえられてなむ。

人

（長野縣長野町）太田貞子

くちなしの名に負ふ、山吹の花はかり、をかしきはあらし。昔懸しき橘の小島ヶ崎に匂ひては、霞に浮ふ宇治の芝船をとゞめ、岩こそ波の立田川に咲きては、水の底にも黄金の色を宿し、又音に聞く玉川わたりには、若鮎とる賤かたつきとなり、ちりかゝる花の雫には、蛙の聲の清さを添へ、いろくつのむつるゝよすかとなれるにもあかすかし。春雨のあしたなと、常よりは早

うれきつゝ、前栽のはし近う見出たすに、八重山吹の露をふくめるか、さと、吹きわたる朝風に匂ひ。こほるゝ風情、まつ目さむる心地そするよ。實の一ッたにといひ出てけんも、さることなから、尚あめの夕へには、七重八重なる花の心いひけん才女の上さへそれもひ出てらるゝ。八重なるは、前栽の小柴垣なとに、一むら咲きたる、こよなう、わきてみ池のほとりにみたれたるは、實に似るものなしや。一重は稍さひしき方もあめれと、あまりことゝしからぬは、尚此の方にぞ心はれかるゝ。まして、いさゝ小川の堤傳ひ、そこはかと咲き續きたる、又さらても野守か小屋のまはらなる垣に、ゆひこめられたるなと、いはん方もあらすかし。只よの人のもてはやすなる、黄金の色の、色なるのみそ口惜しき。節ともいはゝいふへく、黄土黄泉なとのあやしき名にちなみたるもこちたし。されと尚千代をためしの黄菊に立ちならふらんこそ、いとゝ目出たけれ。されはこそ、誠に唐の大和の言の葉にも言ひ出てられて、あせぬにほひを後の世長くもてはやさるるなれ。口なし色といひしも、まことは、さることなから、こも僞りのみ多き世には、かへりて心ゆく方もありぬへきそをかしき。

偽りの多かるよには口なしの
花ぞなか〳〵たのまるゝかな

西尾直子

こがれのなるてぶねたは山吹にこそありけ れ一重にやへにさきみたるまがきもひさし妖色そへてくちなしのいろ にさけはやねもいひしらぬけうらなる花になむありける此の山吹よしきしまの みちにはゆかりふかくいまはむかしをみなのなゝねやへはな はさけともさいふ古き歌の心をしりて太田道灌ぬしをさらしめ和歌をまなばし むるながたちさなりしも此山吹になむかくさきては人にもてはや さるれさはるにおくるゝこそつらけれされさにしきのうつろふなりし もにほひめでたくさきいてたるもまたひさしほにこそ

佐々有鄰子

みのひさつたにさかこちけん、むかしおもへは、此山里のかきれも、ひさしほゆかしうなつかしきは、い はでもしるき何某の君の さひたまひし柴のをり戸のあさ なるへし。春の風おもむろに、霞の衣うらおもしろく吹來て、柳髮おのれさ櫛けつるも、をりから をかしうがきならすつま琴ならて、賤かはた織る手もかなるはかりに、七重八重咲出たる山吹の花みれば、心おのつから春雨ならぬ露にまてぬれてなん、

碓井信子

ごへご答へぬ口なしの色は、一重に黄金なす八重山吹のさきみたるゝ夕はねのけしきのいもいはれぬやさしき花にす こし雨のかゝりたるなさ黄金の色に 白銀の玉をむすひつけたる如く見ゆるは實にもかくや姫の公達等にゆかしきもの見せたまへらんにさ いはれしなかの一つの蓬萊の玉の枝は斯くもやあ らんなさそゝろ思ひ出てらるゝもあまりにけしきのうつくしければにやあなながしき山吹の花〻〻

島山千代子

そこはかさなくかすみ渡れるに汀の柳めもはる〳〵 さ打ちけふりてこちふく風になひくさまいひた てんも中々なる朝ほらけなりやり水のかなたにちりはてし花のかたみさ七重八重お のかしゝいはぬ色にさける山吹の露重けなるか行く水に影を寫してちらぬ も浮ふさ見ゆるさまなさ柳櫻も物かはさいはましけなりあたりに さひかふ蝶の露をつはさにかけたる同し黃金色なるかあやまたるゝもをかし

今藤なか子

七重八重黄金のいろのまは ゆくもいさつやゝかに花さくものをあはれあたなるかせに誘はれて散りにし後はうつせかひみの ひさたになきそいさも〳〵くちをしきやされさこは心なき植物にしあ れはいかにくちをしかなしさいふさもまたせんすへもなまよ みのかひなきここそかし天地の間にありさあらゆる萬の物の鑑さして情あり智あ る人すら春の花秋の錦をかさり姿はあたによそほへさいさも貴きこ ゝろには實をも結はす花さへなきか多き世にいかて山吹をのみさかむへきかは

山本すみね子

櫻の花もちりぬれは春の行方を尋れ んさて井手の玉川にこそ行きにけれ黃金の色の水中に見ゆるうつく〳〵さはたさふるか たもなけれはふるこさの思ひ出つるそうれしきこの花よなさ敷島の道に心 をよするのふかきその昔井手の大臣の香は しき萬葉集を撰はせ給ひしはこの花のもさなるか太田道灌さかいへる武夫の賤の女 のみやひ心にかまけて歌よみそめしもこの花の栞せるさなんされはおの れ拙しさいへさこの花のたすけによりてさしはしうなしうちかた むくれさ日頃のおこたりを花もあはれさ思はぬにやたゝそよさ吹く風にさそは れてちらちらさ

ちるはなひらのわかおもなうてるのみなりけり

御代ちう子

花にはその數その花さま〴〵ありてあるは八重あ るは一重またその色には赤白紫黃桃色なといと多きそかなかによろ つの花にも立ちまさりていとも高貴なるは山吹にこそそも山吹はみと りなる技葉に黃金色なる美しき花咲きたの花の如く大なるきにあらさ れはまかきの下に植ゑてめかむるもいとよしされと此花いかに してか實を結ふことなしされは朝夕此花を見るたひにかゝる美しきけ たかき花にして實を結はさるをいとも〳〵ふしきあることに思ひてなん

大久津みち子

あさ日かけのうらゝなるまゝゆくりなく庭におり たちたるに汀の柳のめもはる〳〵と打けふりて風になひくさまいは ん方なくおもふにいはれに咲ける山吹の水にうつりていとね んなりけるも外山のあたり霞もふかう立ちこめてそかたもとよりいつか小さめの そほふり來るにかの太田のぬしかもとめくれし實一つたになし さて山吹か枝にうたそへて少女こかたへしことなとそゝろに思出てやなら いへに入らんとせしにあめはます〳〵しめやかにふりて山吹の露いよ〳〵 重けに巳れをとゝめかほなるもをかしや

眞鍋直子

春をはこゝにとゝめかほに庭の小柴垣根なう つそて山吹の咲出てつゝも猶いはぬ色に匂へるにもかの七重八重花は咲けとも の古歌の心によそへしなとめかやかしきみやひ心をあらはさ ゝことの思出てられてゆかしさもなつかしさも一しほまさりゆくの みかはかの何某とかやいふますらをのみやひこゝろを染め出たしつるはま たく此花の露そとおもへは小柴垣のあたりの立ちはなれかたくてなん

田津木久子

野のへ山のへあこかれつゝ花鳥の色音にうか れくらしゝまにはや春も殘り少なう成行くこゝろほそさも今更忘ら るゝはかりに垣の山吹の枝もたわゝに咲匂へるにそくれゆく春をもこゝ にひきとゝめたらんやうにてうれしさのいはん方なくて

をしと思ふ春をはこゝにとゝめつゝ匂ふもうれし垣の山吹

降田楨子

櫻のなごりなくちりはてし頃七重八重黃金の色に咲き にほふ山吹こそいとめてたけれ池のみきは小川の邊なとに咲き出てた るは一しほ目とまりてをかしくかけうつる水もにほへる心地しぬ まいて春雨のしめやかにふり注く夕へ露をふくみたる樣は之も云はれす なん春雨よにほへる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花とめ てられしもうへなりやさはあれと此花よかくも美しくかくも淸けに咲きにほ へとも實の一つたになきこそいとも口惜けれ花はうるは しとも匂はかくはしとも其實のなきをいかにかせん七重八重花はさ けとも山吹のみの一つたになきそかなしきとの古歌は人皆のしる所けに 人の上もまた之もまた之れに同しかるへしあはれ世の孃達よゆめ〳〵 此花にならひて實のなきそしりをなうけたまひそ

八木光子

霞ふかうたちこめて艶なる夕つかたそゝろに宿をあくかれいてゝゆくともなしにたとりゆくに荒れたる家のさ すかに木立なとよしめきてみやひかに住みなしたるかありけりふとさ しよりて見れはところせき庭に山吹いと多く咲きみちてやれたるまかきのひま よりもこほれ出てたるさなから彼のなにかしか姫もとめけむ里は覺ねて いとめつらしうおはしなかむる折しもくれゆく空の霞はいつしか雨と なりてしめやかに

そゝきいてたゐあひにあひてなかしき物からこよひひさゝめ降りなまし
かはあたら盛もあなれはてなましさいさくちなしうて

五月五日　兼題　待郭公　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　　　高知縣土佐郡小高坂村　楠瀬兎女子

老かみのこゝろいられにほとゝきす
　ことしはれろくれもはゆるかな

地　　　肥後國菊池郡城北村　佐々小琴子

五月やみはなたちはなはかをれとも
　まつにむなしきやまほとゝきす

人　　　愛知縣中島郡一宮町　土川田鶴子

ほとゝきすきかまほしさに今宵また
　もりのしつくにぬれてけるかな

ひさこゑな五月雨になけほとゝきす
　れさめのさこの夜半のすさひに　　北島切子

はつこゑをもらせ深山のほとゝきす
　こよひきかなんものさおもへは　　田中りん子

けふいくひさつきの空にあくかれて
　まつにかひなきやまほとゝきす　　羽田三諸子

ほとゝきすなきて過行くあさならは
　このつきかけのうれしからまし　　河田いし子

我のみかひさしもまつらんさみたれの
　はれまになのれやまほとゝきす　　川口政子

待ちはひてれぬ夜も痛くふけにけり
　ひさこゑもらせやまほとゝきす　　山本常子

ほとゝきすいつまて音をは忍ふらん
　世は卯のはなのさかりなりけり　　山本のぶ子

れもやらす待あこかれしほとゝきす
　こよひはきなけつきにうかれて　　北島まつ子

ほとゝきすなさか初音をなしむらん
　さつきの山はなつめきにけり　　有坂清子

ほとゝきす今やなかんさこの日ころ
　あかつきかけてまたぬ夜もなき　　大藤原房子

やよやなけこぬよ積りぬほとゝきす
　まつほさひさしひさこゑもかな　　土岐米子

吾やさのかきの卯つきはさきにけり
　はやくもきなけやまほとときす　　[illegible]永萬[illegible]子

あま雲のよそにのみなくほとゝきす
　まつわれにしもこゑをきかせよ　　[illegible]積[illegible]子

初こゑをきかまほしさにれもやらて
　まつ夜かさぬるやまほとゝきす　　[illegible]積陸子

ほとゝきすいつまて初音をしむらん
　きかぬかきりはわれはれさらん　　後藤のぶ子

ありあけの月にいくよもあかしつゝ
　まつそわひしきやまほとときす　　碓井のぶ子

我か宿のはなたちばなはさきぬれさ　　碓井武子

いつか來なかんやまほとゝきす

ほとゝきす松の木のまのいくつくよ
あかすそらたになさかこゑせぬ
碓井和可子

夜もすからまつそ久しきほとゝきす
もらすはつれなはやくきかせよ
碓井はる子

あかつきの空まて待てきほとゝきす
ひとこゑたにももらさゝりけり
大溪あき子

明けやすき夜のいくよをあかせとも
まつにかひなきやまほとゝきす
星野かつ子

ほとゝきす初音きゝしさつけにしは
ひとうらやましわれもまつ身に
星野仁子

ほとゝきすきかまほしさにまつち山
すみたかはらに立たぬ夜もなし
小野田くに子

月かけは落ちこそかゝれあしひきの
やまほとゝきすおとつれのなき
貫井そめ子

月あかし卯のはなさけりほとゝきす
なかぬにあくるみしかよの空に
宇田川よし子

ひとこゑをまつちの山のほとゝきす
ふけてまつ夜のかすつもるなり
小野田かま子

たちはなの花咲きにけりわかやとに
こよひは名のれやまほとゝきす
小野田まく子

松の葉をもるつきかけのかすかにも
ほのかになのれやまほとゝきす
小野田ひて子

卯の花のかきれになのるひとこゑを
くもゐにもらせやまほとゝきす
安井章子

まちわひてゆめもむすはぬ此夜はに
ひとこゑなのれやまほとゝきす
岩崎ふく子

まち〳〵てあか月ちかくなりにけり
はやくもきなけやまほとゝきす
小玉きん子

朝な〳〵まつかひかれに甲斐もなく
あたにすこしつやまほとゝきす
小野田きよ子

ゆき暮れて青葉しこれのかりねにも
きかまくほしきやまほとゝきす
住山幾子

ひとこゑをまつのふか岡にほとゝきす
まちしまつきのまる夜のふけぬる
住山せの子

五月雨のふるにつけてもまたるゝは
またこゑきかぬやまほとゝきす
甲斐莊僊子

いく度かつま戸おしあけまつかひも
なか〳〵つらしやまほとゝきす
佐々有鄰子

いかてかく今年はおそきほとゝきす
こそのはつねはこよひなりしを
澤島信子

村きものこゝろせかれぬほとゝきす
はつねきかせよこよひすくさて
仝　定子

よもすからねられさりけりほとゝきす
はつねやいつとおもひくらして
仝　廣子

我かかとの杉のわかはにほとゝきす
まろしはかりのひとこゑもかな
永井さい子

このころは卯の花つきよかけきよし
やまほとゝきすはやくきてなけ
田代艷子

つきにあめに幾夜まつらんむあらは
岡田もみ子

ひとこゑもらせやまほとゝぎす

ほとゝぎす今夜もいたくふけにけり
あけゆくまてにひとこゑもかな　平澤ふさ子

ほとゝぎすいかに惜みてまつわれを
こゝろくらへにねをしのふらむ　島山百合子

あけてまつねやの板戸のいたつらに
こよひもなかぬほとゝぎすかな　島山千代子

ひと聲をまちわひつゝもほとゝぎす
たくやまふかくたとりきにけり　島山ゆき子

まちわふる宵には鳴かてほとゝぎす
ねさめのとこをおとろかしぬる　小幡千代子

あさな〱まつほと久しほとゝぎす
せめてひとこゑわれにきかせよ　小幡宮美代子

よもすから待とはしらてほとゝぎす
いつこのそらのくもになくらん　栗田口信子

夜もすから初音きかむとほとゝぎす
まくらもさらてまちあかしけり　山田けい子

ほとゝぎす鳴音まつまのあさぼらけ
すゝめなくさへそれかとそ思ふ　今藤なか子

卯月よりまつきまつまのほとゝぎす
いかにはつねをしむなるらん　小町谷里江子

夏來ればまつそまたるゝあしひきの
やまほとゝぎすはつねもらせよ　小町谷園子

いさきなけ山ほとゝぎすわかやとの
うのはなかきのいろあせぬまに　武田粲子

うのはなの月かけきよくなりしより
やまほとゝぎすまたぬよもなし　加賀山やす子

うちしめる五月のころとなりにけり
はやも來てなけやまほとゝぎす　小野寺竹子

つれなさを何にかこたんほとゝぎす
まつ身はこよひひと夜のみかは　島田悦子

中〱にまてはやなかぬほとゝぎす
つきはさやかにすみかくれとも　鳳松たか子

汝かやとの花たちはなはさき初めぬ
とくおとつれよやまほとゝぎす　久門りゑ子

こよひこそひと聲もらせほとゝぎす
いくよもいねすまちあかしたり　久松勢伊子

庭の面のわかはにくらくなりしより
ひとこそまたるゝほとゝぎすかな　野中あさ子

待ち詫ろこゝろもしらすほとゝぎす
なにのさはりにしのひ音もせぬ　百瀬八代子

初こゑをきかまほしさに寐もやらす
いく夜か待ちしやまほとゝぎす　百瀬かつ子

待ちわひて恨みもそするほとゝぎす
いまはいつこのそらに鳴くかと　原いち子

待ちあかすよはも幾夜そひとこゑを
せめてはもらせやまほとゝぎす　増田すゑ子

雨の夜もつきさすよはもほとゝぎす
待つにつれなきしのゝめのそら　勝もゝ代子

明けやすき夏の夜なからほとゝぎす　萩原しげる子

待てはいと〳〵長くも有るかな

ほとゝきすまつにかゝりし月かけの
かたふくまてもなかぬ夜半かな　佐々木ちつね子

たちはなの花さきしよりほとゝきす
よひ〳〵ここに待たれぬるかな　上條よし子

待ちにまちし卯月の空のほとゝきす
またきこなれぬこゑもきこえす　松尾こと子

ほとゝきす松のこすゑのつきさへも
つれなくいりぬにしのやまへに　小野田登宇女子

待ちわひていねむも惜やほとゝきす
こそのはつねはこよひなりしを　小野寺のふ子

花ちりてこすゑのわかはしけるころ
待たぬ日もなしやまほとゝきす　植木綱子

ほとゝきすまたれぬる夜も夏ころも
うらめつらしきはつねきかせよ　青木辰子

ちきりおきしものならはなと郭公
まつにこぬ夜もなにかうらみむ　青木喜代子

戸もさゝて今宵はまたんほとゝきす
たゝひとこゑのはつねきかせよ　中谷その子

夏ころもぬきかへてよりほとゝきす
ひと聲になれかはつ音をそまつ　高井孟子

楽しくもわひしきものはほとゝきす
まつよひ〳〵のこゝろなりけり　清水あい子

ふりつゝく雨にたのみしほとゝきす
けふもむなしくすこしつるかな　藤井ます子

月かけのきよきこよひはことさらに
はつねまたるゝほとゝきすかな　中谷いく子

おなしくは待つかひありて有明の
つきになかなんやまほとゝきす　澤邊清淑子

むなしくも月のみふけてほとゝきす
まてともまてこそらたのめなる　河野文子

ことしこそ初音をひとにかたらめと
まつにかひなきやまほとゝきす　眞鍋直子

待ち詫ろこゝろもしらてほとゝきす
なとひとこゑををしむなるらむ　名取正代子

我かやとの花たちはなの香をとめて
ひとこゑもらせやまほとゝきす　青羽茂枝子

待つからに聲をしむらんほとゝきす
まつともなくてすこしても見ん　太田眞子

けふもまた山ちくらしつほとゝきす
なれかはつねのきかまほしさに　山崎しつ子

かく計り待ちにまてともほとゝきす
こゝろもしらてよそになくらむ　大溪案子

よもすから待ちにまつ也ほとゝきす
みやまをいてゝわかやとになけ　大溪眞子

かく計りまつともしらてほとゝきす
たゝひとこゑをなにをしむらむ　山根久子

春くれてあをはしけれるころよりそ
まつもひさしきやまほとゝきす　北村てい子

はるはすきさくらはちれり今よりは　北村華子

よひ〳〵またんやまほとゝきす

かくまてにまてるこゝろをしら雲の　小森さた子
よそにもらすかやまほとゝきす

ほとゝきすなくれまつまの詫しさに　三谷起美子
こよひもよたゝそてそぬれける

五月五日　兼題　除隊の兵士を迎ふる詞

佐々有郷子

清國にては荒野の霜をふみくたき臺灣島にては眞金もさけぬはかりの照日さかりをしのき足引の山路をよちては賊徒をなきはらひ島しもの海にうきゐては敵の軍艦をうちくたき大空たかき勲功たてて金鵄勲章かゞやかしあたりまはゆく鷄啼くふりにしさとの親族等のまちにまちましし殿戸せはしとかへり來ませる忠義鐵心の人等をむかへたまへる席のはしに妾も庭雀うすゞまりゐてむかへ奉ること　のめてたさよう れしさよはた尊さよ

眞鍋直子

事なきときにありても兵卒たるのつとめを盡したる人はいと〳〵高き名よを得たる人なるにまして君には征清の役おこりてより このかたその役にしたかひて海を渡り風土ことなるの地にいたり寒暑を凌き砲煙彈雨ををかしあるは惡疫傳播の中に立ちて身命を惜ます もとより此地をはなるゝや生還を期せすといへとも幾度か生死のさかひに出入し遂に國威國光を海外にかゝやかしめてたくみ軍をさまりて凱歌高くうたひ幸に九死の中に一生を得てかへり玉ひ臣民たるものゝいとも大なるつとめを盡しかゝるいとも大なる名よを荷ひて國民のかゝみとなり玉へる君にはけふ除隊となり玉ひて故郷にかへりき玉ふを迎へまつるよろこひ何にたとへん實に君一身の榮のみならす かゝる忠勇義烈なる人を出せる此さとの榮とうれしさのあまりをこかましけれと御ことほきかてら一言かくなむ

名取正代子

日清の事起り　皇上畏くも大纛を廣島に進められ以て軍旅を統へ給ひ我忠實勇武なる陸海軍人は恭く御命を奉してよろこひいさみて軍に從ひ戰にあること茲に一年風土の異る所炎熱極寒はいふも更なり彈丸雨飛の間も物ともせすひたすら大君の爲國の爲につくしし眞心の高かりけれは苦もなく敵を打ちなひけ忽ち仇を平けて我日の本の御光をは世界萬國いたらぬくまなくかゝやかしつゝ旭の御旗いや高くかゝけてかへりぬる其いさをは實に我　皇上御親征の御稜威いやかしこきによるとはいへ又君等軍人の忠勇によらすはあるへからす今や干戈戢り鳳駕凱旋せられしを以て君等も解隊せられ錦衣郷に歸らる因て我等國民共にはかり相携へて茲に歡迎し聊其勞を謝せんとて拙き筆もかへりみすかくなむ

太田貞子

三年てふ年の關も名殘りなう明け果てゝ けふ此の古郷に再ひ御面影を見奉ることのうれしさよ思へは君か大和心を花に ちかひて近衞の隊に入りたまひし頃は世の中さしもにあらけくてとも すれは双の道も忘れ果つへう見ゐにしを又の年の夏高麗山おろしあら〳〵しくなりまさりてより太平の夢路とみにと絶ゐして世は俄に忙かはし うもなり來つゝ君にもはる〳〵と潮の八重路に船出したまひてよる波の なみならぬ御物思にさやかくと御心を碎かせたまひあるはけ うとき林に只ひとり斥侯のあやふきにもあたらせたまひしならんある はけはしき山に野に飢

の林分けさせたまひ火たまのおもひに立たせた まひしこともやありけんあはれ其のいたつきいかゝなりけんいかはかりな りけんされと又平壌に威海に朝日の旗手なびかぬ方なきを見させたま ひてはいかゝよろこばせたまひけんかならずやそのいたつきにもかへ かたうやおぼしたまひけん今し君をこゝに迎へ奉り見奉るにつけ ても過ぎにし御苦しさのほとやいかゝなりけんおもふにも堪はず此の頃は又や んことなき叙勲をさへ受けさせ給ひぬとか誠に門出の折花に ちかひし大和心のほとも思ひしられてまばゆき身の御光り はかの朝日に匂ふ山櫻にもたぐへまほしきや

北村孝子

明治廿七年我國清國と兵を交ふるや皇國の向ふ所風靡せ さるはなく戦へは必ず勝ち攻れは必ず取りて東洋第一 の港なる旅順口さへ我有となる清廷遂にあまたの償金を納れて和を請ふ征清の皇軍めで たくをさまりその賑はしさもいさましさもまた一層なる大稜威の かしこきにこそ

君をおもひくにを思ひてひとすちにこゝろをつくすやまとますらを茲にわらはか知人去年の彌生に 後備の召集に應して征清の途にのぼられ給ひしにこゝにその名誉の功名を負ひ勲章と賞典と を拜受し錦を着かさりて本日歸鄕せらるゝ誰か歡迎せさるへきそのいへ〱 には國旗をかゝけ皆我もく〱と停車場まて出て迎へしにしはし か程に滊車は一聲の笛と共に止まりぬれは萬歳のこゑ四方にひゝきわ たりぬ盃せぬ君か代の千代萬代まて祝ひまつるけに〱めてたきことにな ん

かちかへる大みいくさをことふきてみはたかゝけぬやさなかりけり

北村てい子

去年の戦に召に應して勇ましく門出してかの荒波へ だつるから國にわたりてきし花〱しく戦ひ身に一點のきずだに受けず目出度凱旋なし今日なん首尾よく除隊となりて歸鄕し給ふなる其父母なる 人あるは妻子あるは妹弟今日を一日千秋の思ひして待ち給ふ心根い かはかりうれしからんとおしはかられぬ 我家より停車場まではいと程近かければ我もいさ迎へ參らせんとおもむけはもはや歡迎者は黑山をき つき祝何々君凱旋の旗は數ふるあたはず兩側に立並べりやゝ ありて滊笛のかすかに聞ゆると共に滊車そあらはれぬる其止まるもおそ しと先を爭ひ勇ましくとひなりし兵士何れも軍服いかめし くましてや去年數度の戰功にやむれには勲章さへかゝやけり一同万歳の聲四方にひ ゝきしはしはなりもやまさりき道すから思ふやう我も男と生れな は君のため國のため天晴てからを身に負ひて斯も今に持てはやさ れなんものをと今更甲斐なき身をかこつもをかし

君のためさゝけしいのちなからへてほまれとともにかへるますらを



兼題

五月廿日　歌……田家卯花　文……靖國神社に詣づ

六月五日　歌……梅雨霽　文……田植を見る

生田目經德編

標註 雅文消息集 全

菊板美本

全一冊

近刊

日用消息文の摸範は中古文にとらざれど雅馴なる言詞艶麗なる文章を綴りがたし慶長以來文學の大家古文の學を興してより契仲、眞淵、宣長、千蔭、翁麿、濱臣、春海など名家相繼ぎて斯の學を盛ならしめ國文の書世に出づるもの甚多く消息文の如きもその躰大にとゝのひ雅馴にして艶麗なる好摸範も多くあらはれたりしが其の後また多く世に行はれずなりぬ近來國文の再盛なるに方りて之を學び日用の消息に適用するはまことに必要のことなりこの篇專心を用ゐて古人の消息中より高尚にして雅馴なるものを採り四季雜の各部に分ち參考者の便よからんことをはかれり國文を修むるもの一本を坐側にをきて摸範となさむ益を得ること必大なるべし

東京々橋區築地二丁目二十一番地

發行所　（電話番號一九四六）　國光社

女鑑第百七號目錄

〜明治二十四年八月八日内務省許可
明治廿五年三月十二日遞信省認可〜

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納税の求書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊(三ヶ月分)	十二冊(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年五月四日印刷
同年五月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人 川崎直衞
同
編輯人 山根勇藏
同
發行所(電話番號一九四六) 國光社

(印刷所 東京國光社印刷部)